多賀城市文化財調査報告書第42集

高　崎　遺　跡

—第13～16次調査報告書—

平成８年３月

多賀城市教育委員会

高　崎　遺　跡

—第13～16次調査報告書—

平成８年３月

多賀城市教育委員会

序　　文

多賀城市教育委員会が高崎遺跡の調査を開始したのは昭和55年のことであります。以来継続的に調査を重ね、本年度で18回を数えるまでに至りました。調査成果も着実に蓄積され、遺跡の解明が進んでいるように思われます。

さて、本書は平成６年に実施した第13〜15次調査と翌７年に行った第16次調査の成果を収録したものです。いずれも遺構・遺物が少なく、従って簡単な内容となっております。しかし、今後隣接地を調査する際には貴重な資料となることは疑いなく、ひいては高崎遺跡の解明につながると考えられます。埋蔵文化財調査センターでは、年間の事業概要をまとめた「年報」を毎年刊行しており、その中に発掘調査の略報を収録しておりますが、別個の事業として実施した発掘調査の成果を１冊にまとめて刊行するのはこれが初めての試みです。成果の大小にかかわらず、このような形で速やかに調査結果をまとめ、公にすることは私達に課せられた義務と心得、今後一層努力する所存です。

最後になりましたが、本書の作成にあたり、ご指導・ご協力を頂いた宮城県多賀城跡調査研究所および国立歴史民俗博物館の諸先生方に対し、衷心より御礼申し上げます。

平成８年３月

多賀城市教育委員会
教育長　櫻　井　茂　男

例　　言

1. 本書は平成６・７年度に実施した高崎遺跡第13～16次調査の成果をまとめたものである。
2. 遺構番号は第１次調査からの一連番号である。
3. 本書中で使用した遺構の分類記号は右のとおりである。

SB	建　物	SA	柱　列	SI	竪穴住居
SD	溝	SK	土　壙	SX	その他

4. 調査区の実測基準線は「平面直角座標系Ｘ」を使用して設定している。
5. 挿図中の高さは標高値を示している。
6. 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を参照した。
7. 本書の作成に際し、瓦については進藤秋輝氏（宮城県多賀城跡調査研究所長）、土器については丹羽茂氏（宮城県多賀城跡調査研究所研究第一科長）から御教示を賜った。また、第16次調査で出土した土器の付着物については永嶋正春氏（国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授）に分析を依頼し、その結果は「Ｖ．第16次調査」に収録した。
8. 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴが千葉孝弥、Ⅱが石川俊英、Ⅳが武田健市であり、編集は千葉が行った。
9. 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が映管している

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置とこれまでの調査成果……1
Ⅱ．第13次調査……2
Ⅲ．第14次調査……4
Ⅳ．第15次調査……7
Ⅴ．第16次調査……12

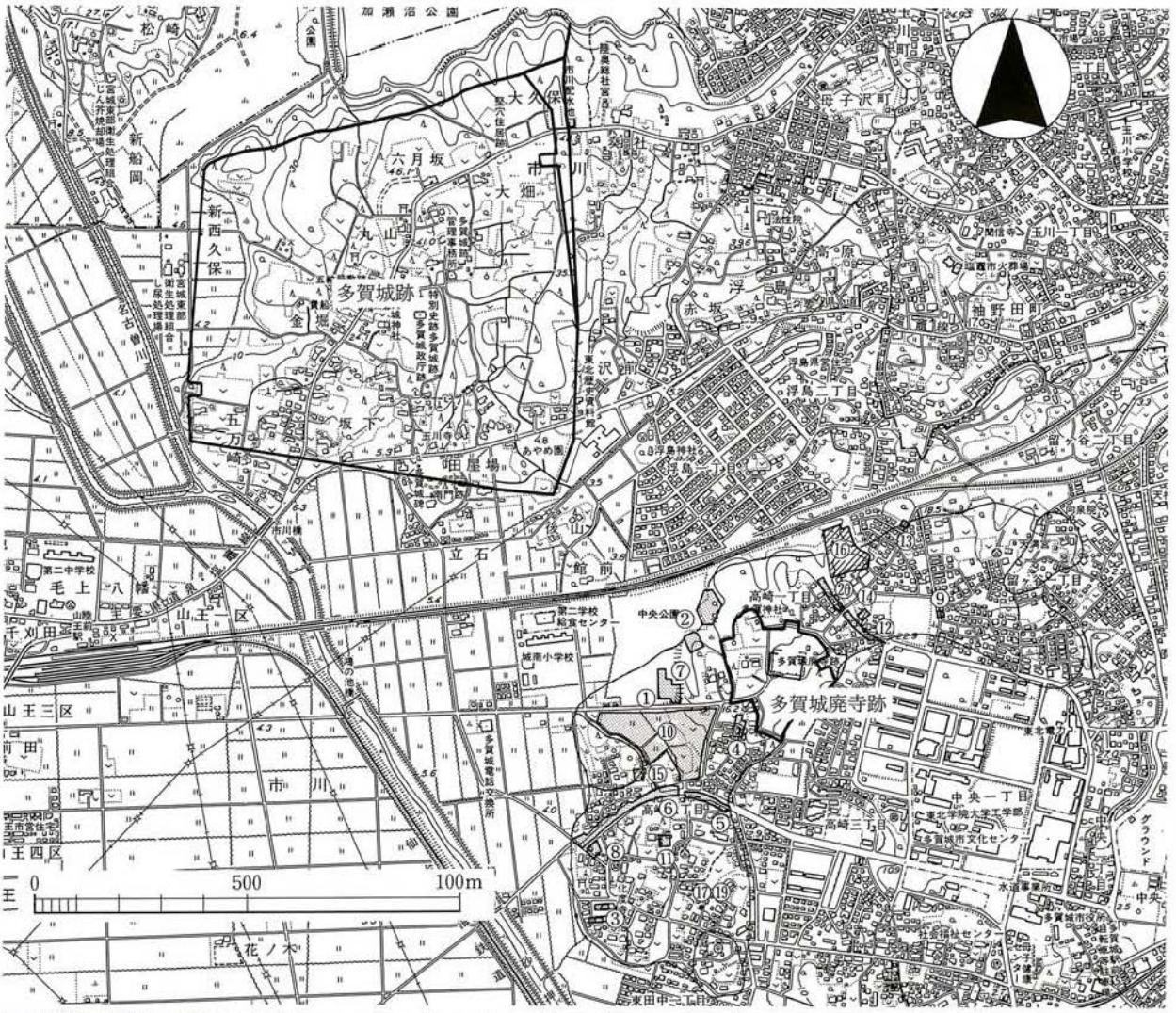
調　査　要　項

1. 遺 跡 名　高崎遺跡（宮城県遺跡登録番号　18018）
2. 調査主体　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井茂男
3. 調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所　長　鳥山文夫

	所在地	調査面積	調査期間	調査員	調査参加者
第13次調査	高崎一丁目117―6	185㎡（対象面積216㎡）	平成６年７月４日～７月29日	石川俊英	阿部　弘・奥田陸男・加藤昭一・加藤正士・鎌田　傳・鈴木太仲・鈴木寿二・星　秀雄・渡辺正一
第14次調査	高崎一丁目14―1	257㎡（対象面積416㎡）	平成６年８月24日～８月31日	千葉孝弥	浅沼　良・奥田陸男・加藤昭一・松本喜一 （遺物整理）須藤美智子・伊藤美恵子・下山美香
第15次調査	高崎二丁目246―14、246―19	200㎡	平成６年９月７日～９月28日	瀧口　卓 武田健市	阿部　弘・遠藤一代・奥田陸男・加藤昭一・菅野文夫・熊谷サツキ・後藤恵子・桜井エイ子・松本喜一 （遺物整理）大山真由美・黒田啓子・陶山喜美栄・高橋知賀子
第16次調査	高崎一丁目16―1外６筆	2,137㎡（8,530㎡）	平成７年６月19日～８月28日	千葉孝弥	浅野　真・阿部トシコ・内海義雄・長田栄太郎・後藤しのぶ・小松まり・今野孝男・斎藤ゆき子・南城美岐子・松本喜一・水越朝治・渡辺正一・渡辺ゆき子　（遺物整理）柏倉霜代・浦風志恵子・鹿野智子

Ⅰ．遺跡の位置とこれまでの調査成果

高崎遺跡は本市のほぼ中央部に所在する遺跡である。多賀城廃寺を取り込むように南北約1.1km、東西約1.2kmの範囲に広がっており、その大部分が標高16m未満の低丘陵になっている。昭和55年度以降、多賀城市教育委員会によって継続的に調査が行われ、古墳時代前期から江戸時代に至る遺構・遺物が発見されている。それらの概要については以下の表の通りである。



	調査次数	調査年度	調査地区	時代	発見遺構	出土遺物
1	第１時調査	昭和55年	弥勒地区	平安時代	掘立柱建物跡、合口甕棺	
2	第２次調査	昭和56年	弥勒地区	平安時代		瓦
3	第３次調査	昭和57年	表地区	平安時代	溝跡、土壙、埋甕	
4	第４次調査	昭和60年	坂下地区	平安時代	柱列跡、溝跡、土壙	瓦、風字硯
5	第５次調査	昭和60年	井戸尻地区	平安時代	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、柱列跡、溝跡、土壙	瓦、円面硯、硯
6	６次調査	昭和61年	井戸尻地区	平安時代 中世 近世	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、柱列跡、井戸跡、溝跡、水田跡、合口甕棺 溝跡、井戸跡、土壙 溝跡	墨書土器、瓦、硯 青磁、播鉢 瓦、寛永通宝
7	第７次調査	昭和63年	弥勒地区	平安時代 近世	掘立柱建物跡、溝跡、土壙 掘立柱建物、溝跡、土壙、地鎮遺構	瓦 染付椀・皿、白磁皿、施釉陶器、土鍋、瓦質火鉢、カワラケ、寛永通宝
8	第８次調査	平成３年	井戸尻地区	平安時代 中世 近世	掘立柱建物、井戸跡、水田跡、道路跡 掘立柱建物跡、溝跡、土壙 道路跡	墨書土器 無釉陶器（甕・播鉢） 陶器破片
9	第９次調査	平成４年	留ケ谷地区	平安時代	竪穴住居跡、溝跡、土壙	
10	第10次調査	平成５年		平安時代	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、鍛冶工房跡、井戸跡、溝跡、土壙	灰釉陶器、瓦、石帯、鉄製、羽口、送風管、鍛造剝片
11	第11次調査	平成６年	井戸尻地区	平安時代		
12	第12次調査	平成６年		平安時代	竪穴住居跡、溝跡	瓦。耳付円面硯、土錘
13	第13次調査	平成６年				
14	第14次調査	平成６年		平安時代	溝跡	
15	第15次調査	平成６年		平安時代	竪穴住居跡、土壙	
16	第16次調査	平成７年		平安時代	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壙	施釉陶器、円面硯、転用硯
17	第17次調査	平成７年		古墳時代 奈良時代 平安時代 中世	竪穴住居跡 竪穴住居跡 掘立柱建物跡、溝跡	土師器壺、石製模造品 土師器杯・甕、須恵器杯 磁器片、永乗通宝
18	第18次調査	平成７年	留ケ谷地区	古代	溝跡、土壙、柱穴	土師器、須恵器、瓦、焼き土器
19	確認調査	平成２年		古代 中世	遺物包含層 溝跡	
20	確認調査	平成５年		不明	溝跡、土壙	

第１図　調査区位置図・成果一覧表

II．第 13 次 調 査

1．調査に至る経緯と経過

本調査については、個人住宅建築の計画が提示されたため、これについて協議を行った。当該地は高崎遺跡の範囲に含まれており、また開発方法については丘陵を一部削り取るため、事前調査が必要の旨を回答した。その後、申請者より発掘調査の依頼があり、７月４日より発掘調査を開始した。はじめに重機を使って表土剥離を行なった。調査区内は堆積層がなく、すぐに地山が露出した。表土からは古代の土器類が若干出土した。６日より遺構確認作業に入る。遺構と考えられるものは、調査区を東西に走る溝状のくぼみ１条と、土壙状の落ち込み２基であった。図面作成時に必要な３ｍ×３ｍの基準点を設定する(19日)。調査は各遺構の写真撮影、土層断面図及び、平面図作成を行なった後、地形測量を行ない７月29日終了した。

2．調査成果

発見された遺構は、溝跡１条と浅い土壙状の落ち込み２基である。これらはいずれも地山上で見つかっている。いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。以下、概要を記述する。

ＳＤ1163溝跡

調査区南側で発見した東西溝である。ＳＫ1165と重複しており、それより新しい。規模は幅0.67～1.02ｍ、深さ0.28ｍである。溝の両端は、調査区外に延びているため、11.4ｍまでしか確認できなかった。埋土は上層より暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土で層中に地山土を含んでいる。これらの層は木の根等で攪乱を受けたしまりのない土であることから、本溝跡は近世以降のものと考えられる。

ＳＫ1164土壙

調査区東側で発見した。平面形は楕円形をなし、規模は長径1.32ｍ、短径0.83ｍ、深さ８㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は２層に分けられる。黄褐色土を主体とし、層中には酸化鉄粒子、地山ブロックを含んでいる。

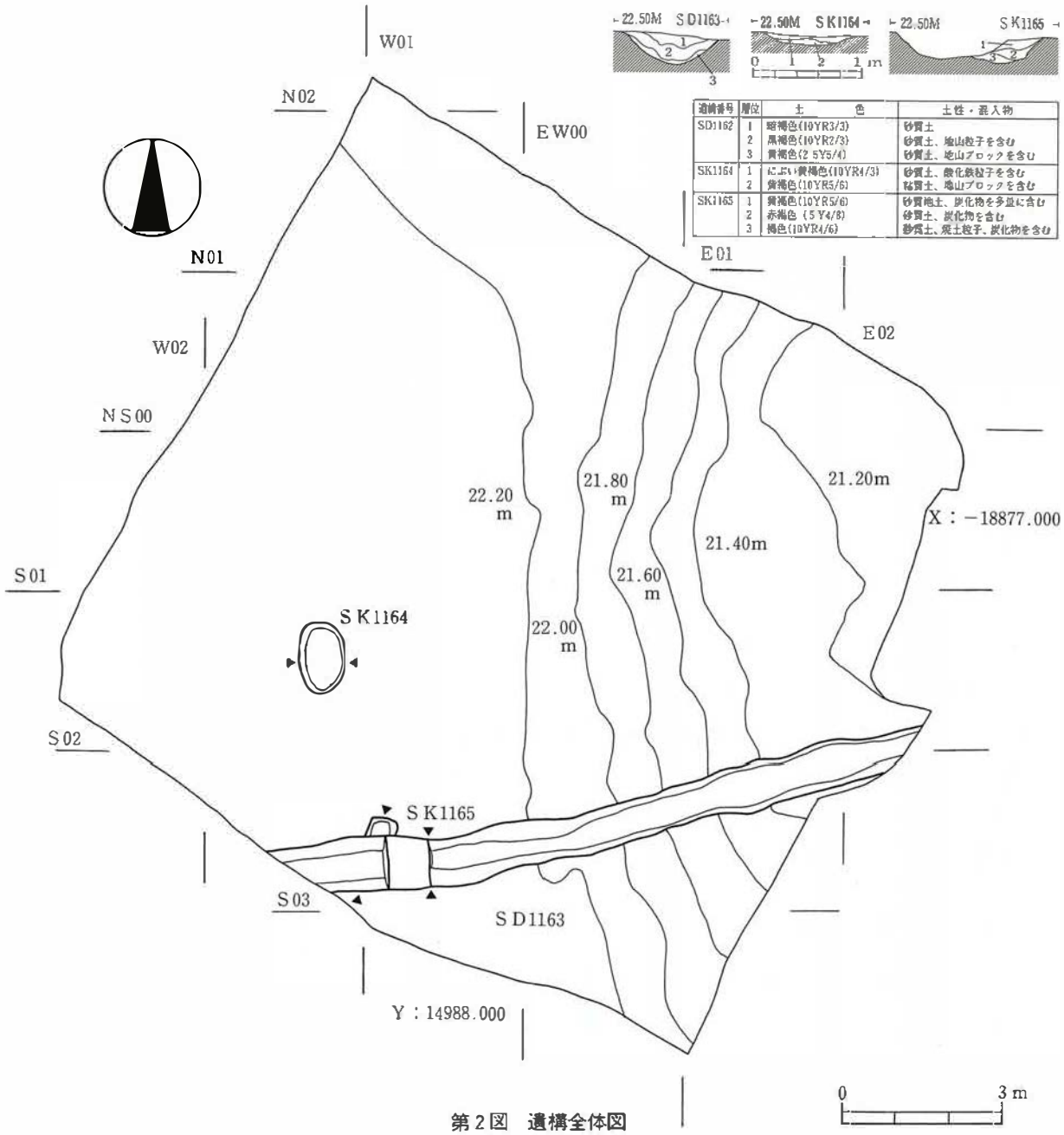
ＳＫ1165土壙

調査区南側で発見した。ＳＤ1163よって南側を失っている。平面形は残存している所で見ると方形である。規模は東西0.49ｍ、南北0.32ｍ以上で、深さは0.21ｍである。埋土は上層より黄褐色土、赤褐色土、褐色土である。層中には焼土粒子、炭化物を多量に含んでいる。

3．小　結

1．調査の結果、発見された遺構は溝跡１条と、土壙２基である。

2．これらの遺構の年代については、出土遺物がないため不明である。



遺構番号	層位	土色	土性・混入物
SD1162	1	暗褐色(10YR3/3)	砂質土
	2	黒褐色(10YR2/3)	砂質土、地山粒子を含む
	3	黄褐色(2.5Y5/4)	砂質土、地山ブロックを含む
SK1164	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質土、酸化鉄粒子を含む
	2	黄褐色(10YR5/6)	粘質土、地山ブロックを含む
SK1165	1	黄褐色(10YR5/6)	砂質地土、炭化物を多量に含む
	2	赤褐色（5Y4/8)	砂質土、炭化物を含む
	3	褐色(10YR4/6)	砂質土、焼土粒子、炭化物を含む

第２図　遺構全体図

調査区全景

Ⅲ. 第 14 次 調 査

1. 調査区の位置

本調査区は、多賀城廃寺の北東約200ｍの地点であり、緩やかな丘陵北斜面に所在している。本地点より南側においては平坦面もみられるが、北側は大小の谷が発達した複雑な地形となっている。

2. 調査に至る経緯と経過

本調査は、高崎一丁目14番１における資材置場建設に係るものである。その予定地は建設中の都市計画道路（史跡連絡線）に面しており、同道路の建設計画では現地表を掘削して路面を造成することになっているため、資材置場も路面と同じ高さに掘削して造成したいという意向であった。対象地区周辺においては、平成４年に北側隣接地で個人住宅建設にかかる緊急調査を実施しているが遺構・遺物は発見されていない。また、西側隣接地においては平成５年度から都市計画道路（史跡連絡線）に係る調査を実施しており、わずかに東西溝２条と土器埋設遺構を発見している。このように、当該地周辺における遺構の分布は極めて希薄であると判断され、第12次調査と並行して調査を実施することに決定した。

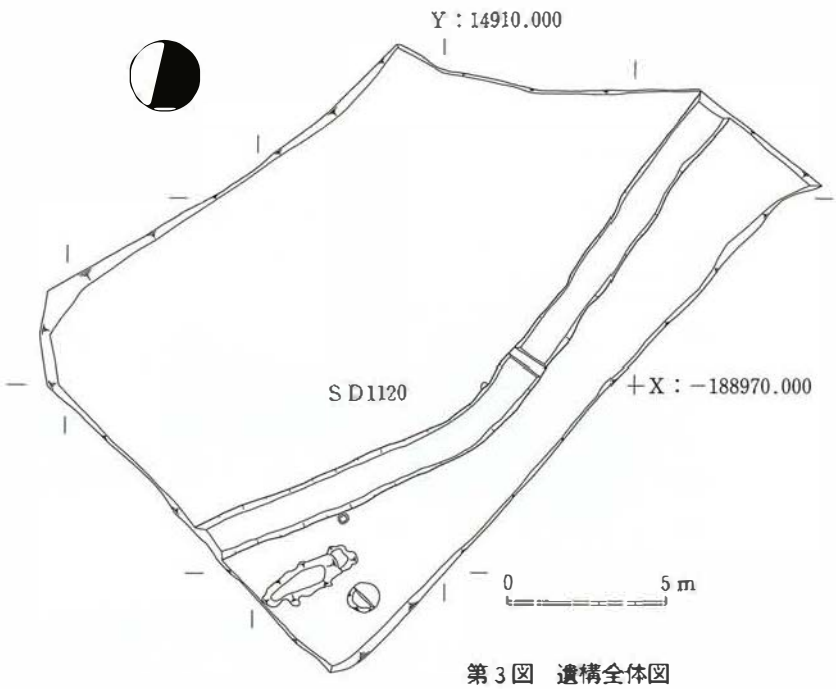
調査の経過は次のとおりである。

8.24　調査区の境界確認。南端部に東西トレンチを設定し、重機にて表土剝離を行う。地山面上で東西溝１条発見。*8.25*　引き続き東西溝の検出作業。*8.26*　東西溝の堆積土掘り下げ開始。１層から土器や瓦出土。*8.29*　東西溝の堆積土掘り下げ作業と並行してトレンチを北側に拡張。*8.30*　東西溝堆積土掘り下げ作業終了。北側拡張部分の遺構検出作業を行うが遺構なし。*8.31*　調査区写真撮影。第12次調査区から測量の基準点を移動し、20分の１で平面図・断面図作成。調査終了。

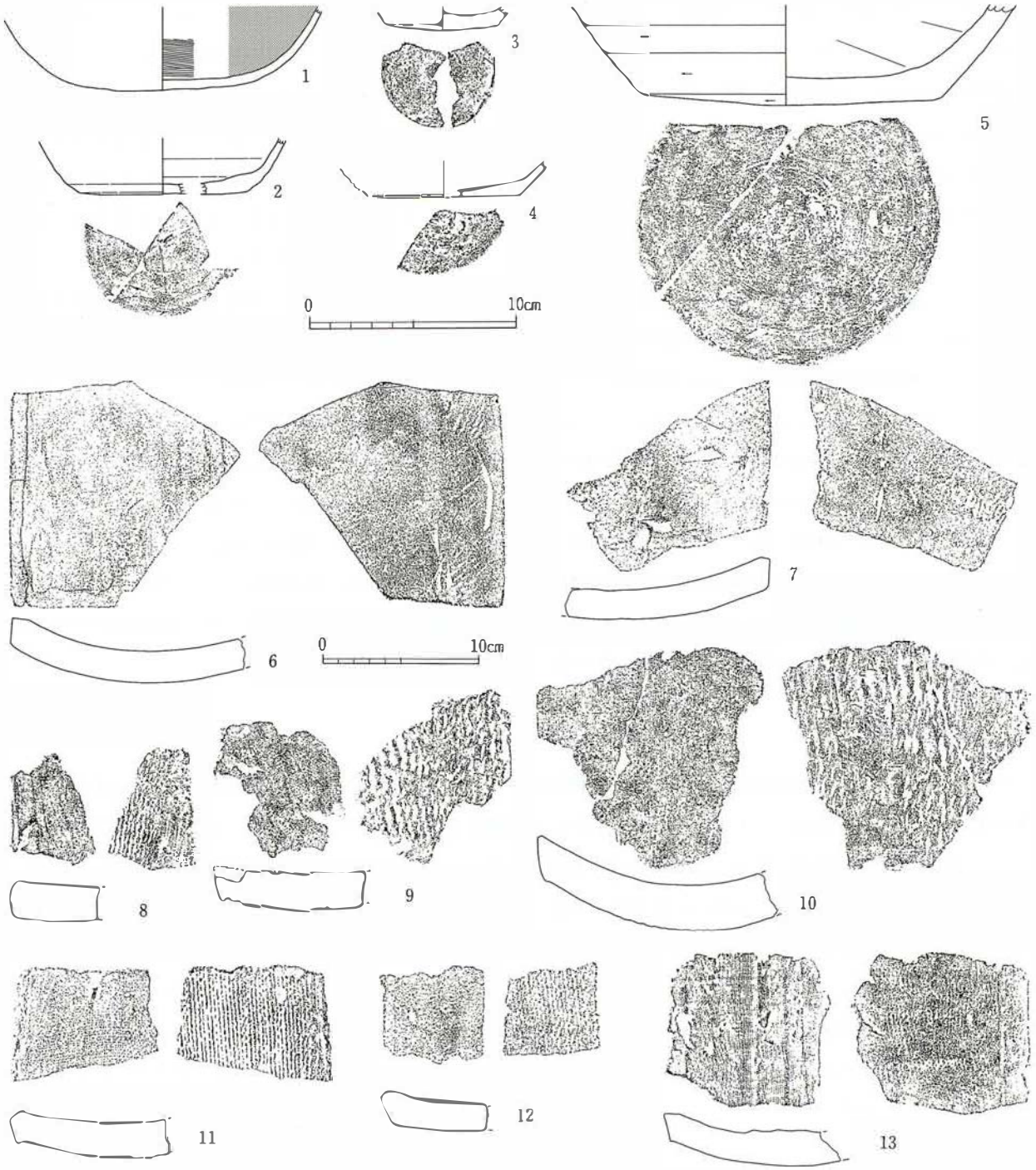
3. 発見した遺構と遺物

表土の下は赤褐色のローム層からなる地山である。その層上で溝跡１条を発見した。

ＳＤ1120は調査区のやや南側で発見した溝跡である。西側の第12次調査区から続いており、更に調査区外東側へ延びている。第12次調査区分と合計すると東西約37ｍにわたって検出したことになる。西半部は東で北に約23度、東半部は約55度偏しており、大きく屈曲している。上幅約1.4ｍ、下幅約1.0ｍであり、深さは0.16～0.39ｍである。底



第３図　遺構全体図



番号	遺物名	特徴	底径cm	登録番号
1	土師器杯	【外面】底部：手持ちヘラケズり、【内面】体部：ヘラミガキ、黒色処理		R－4
2	須恵器杯	【外面】体部：ロクロナデ、底部：ヘラ切り、【内面】ロクロナデ	(7.8)	R－5
3	須恵器杯	【外面】体部：ロクロナデ、底部：ヘラ切り、【内面】ロクロナデ	(5.4)	R－6
4	須恵器杯	【外面】体部：ロクロナデ、底部：ヘラ切り、【内面】ロクロナデ	(7.4)	R－8
5	須恵器鉢	【外面】体部・底部：回転ヘラケズり、【内面】ロクロナデ	(14.3)	R－9

	遺物名	技法	分類	特徴	登録番号
6	平瓦	桶巻き作り	ⅠA－a類	【凹面】第1次布目→ナデ→凸型台圧痕、【凸面】縄叩き目→第2次布目→ナデ	R－17
7	平瓦	桶巻き作り	ⅠA－a類	【凹面】糸切り痕→第1次布目→ナデ→凸型台圧痕、【凸面】縄叩き目→ナデ	R－16
8	平瓦	一枚作り	ⅡB－a類	【凹面】布目→ナデ、【凸面】縄叩き目（つぶれぎみ）	R－21
9	平瓦	一枚作り	ⅡB－b1類	【凹面】布目→ナデ、【凸面】縄叩き目（つぶれぎみ）	R－20
10	平瓦	一枚作り	ⅡB－b1類	【凹面】布目→ナデ、【凸面】縄叩き目（つぶれぎみ）	R－19
11	平瓦	一枚作り	ⅡB－b類	【凹面】布目→凸型台圧痕→ナデ、【凸面】縄叩き目（細かい・つぶれぎみ）	R－15
12	平瓦	一枚作り	ⅡB－a類	【凹面】凸型台圧痕→ナデ、【凸面】縄叩き目（細かい・つぶれぎみ）	R－14
13	平瓦	桶巻き作り		【凹面】糸切り痕→第1次布目・模骨圧痕→ナデ、【凸面】縄叩き目→ヨコナデ	R－18

第4図　ＳＤ1120第１層出土遺物

面はほぼ平坦であり、東側から西側へ向かってわずかに傾斜している。比高差は約0.2mである。堆積土は2層に区分することができ、1層は地山に類似した黄褐色砂質土、2層はにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は1層から土師器杯・甕、須恵器杯・高台杯・高杯・蓋・甕・瓶、丸瓦、平瓦、羽口が出土している。いずれも破片で全体の知れるものはない。土師器杯には底部破片資料が4点ある。第4図1は非ロクロ調整の杯である。底部はやや丸底気味であり、摩滅しているため細部の観察が困難であるが砂粒の動きが観察できることから手持ちヘラケズリを行っていると見られる。体部から底部にかけては緩やかに移行しており、ロクロ調整を行っていない可能性が高い。この他、糸切り痕がわずかに残存しているものが1点、ロクロ調整後手持ちヘラケズリを施しているものが1点出土している。土師器甕には口縁部破片資料が2点ある。その内の1点は、口縁部が肥厚し、体部との境に沈線が巡っている。外面はヨコナデ調整、内面はハケメ調整が施されている。須恵器杯には底部破片資料が3点ある。いずれも、ロクロからの切り離しはヘラ切りである。2は底部外面に「×」のヘラ描きがある。焼成前に施されたものである。また、口縁部破片資料の中には灯明皿として使用された痕跡をとどめているものが1点ある。須恵器甕には底部破片資料が2点ある。5は体部下端から底部全体が回転ヘラケズリ調整されているものである。内面底部が丁寧にロクロナデ調整されていることから鉢に近い形態と推定される。瓦は、丸瓦と平瓦が出土しており、平瓦についてみると、多賀城政庁第Ⅰ期のもの（6・7・11・13)、第Ⅱ期のもの（9・10)、第Ⅱ期か第Ⅲ期か判断が難しいもの（8・12）などがある。羽口は破片が2点出土している。その内の1点は外面に赤褐色やオリーブ色の溶解物が付着している。

4. 遺構の年代

ＳＤ1120から出土した土師器杯は非ロクロ調整のものとロクロ調整のものとがあり、後者にはロクロ調整後手持ヘラケズリを施したものがある。甕はロクロ調整を行わないものである。また、須恵器杯はすべてヘラ切り無調整のものである。赤焼き土器は出土していない。このような土器群の特徴は白鳥良一氏の「多賀城跡出土土器の変遷」（註）によるとＢ・Ｃ・Ｄ群土器と分類されているものに認られる。Ｂ群土器は8世紀末頃、Ｄ群土器は9世紀後半頃とされている。瓦については、多賀城政庁第Ⅱ期ないし第Ⅲ期の平瓦が最も新しいものである。政庁第Ⅲ期は780年から869年までであり、瓦が廃棄される状況を考えれば9世紀後葉の年代が与えられよう。ＳＤ1120溝1層出土資料はいずれも破片資料であり、出土量も少ないことから、8世紀末から9世紀頃と幅をもたせて捉えざるをえない。本溝跡の年代についてもおおよそその頃と考えておきたい。

5. まとめ

1. 丘陵北斜面において溝跡を1条発見した。
2. 溝跡の年代は8世紀末から9世紀後半頃であり、性格については不明である。

(註)白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所　1980

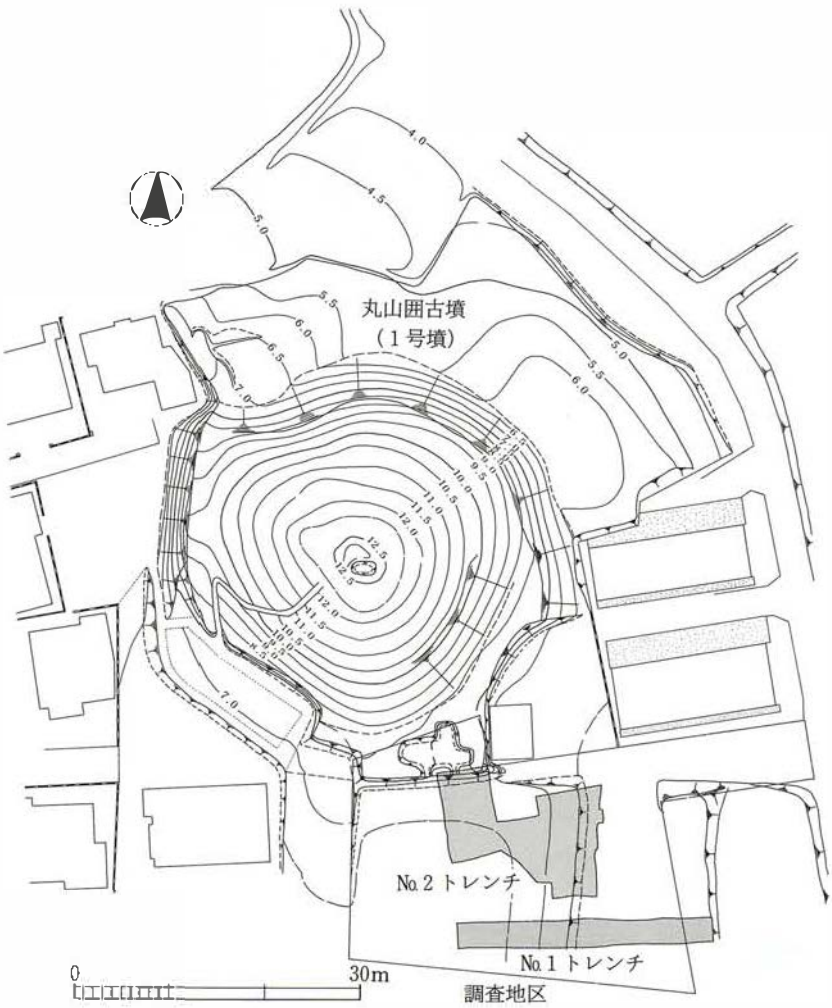
Ⅳ. 第 15 次 調 査

1. 調査にいたる経緯

本調査については、平成６年８月に塩釜中央不動産より当該地における宅地造成計画の提示があり、本件開発計画について協議を行った。開発は盛土造成であるため地下に影響は及ばないとのことであったが、丸山囲古墳群１号墳に隣接することから、確認調査が必要である旨を回答した。その後、塩釜中央不動産より発掘調査の依頼があり、調査の日程、費用の調整等を行い、９月７日より調査を開始した。

2. 調査経過

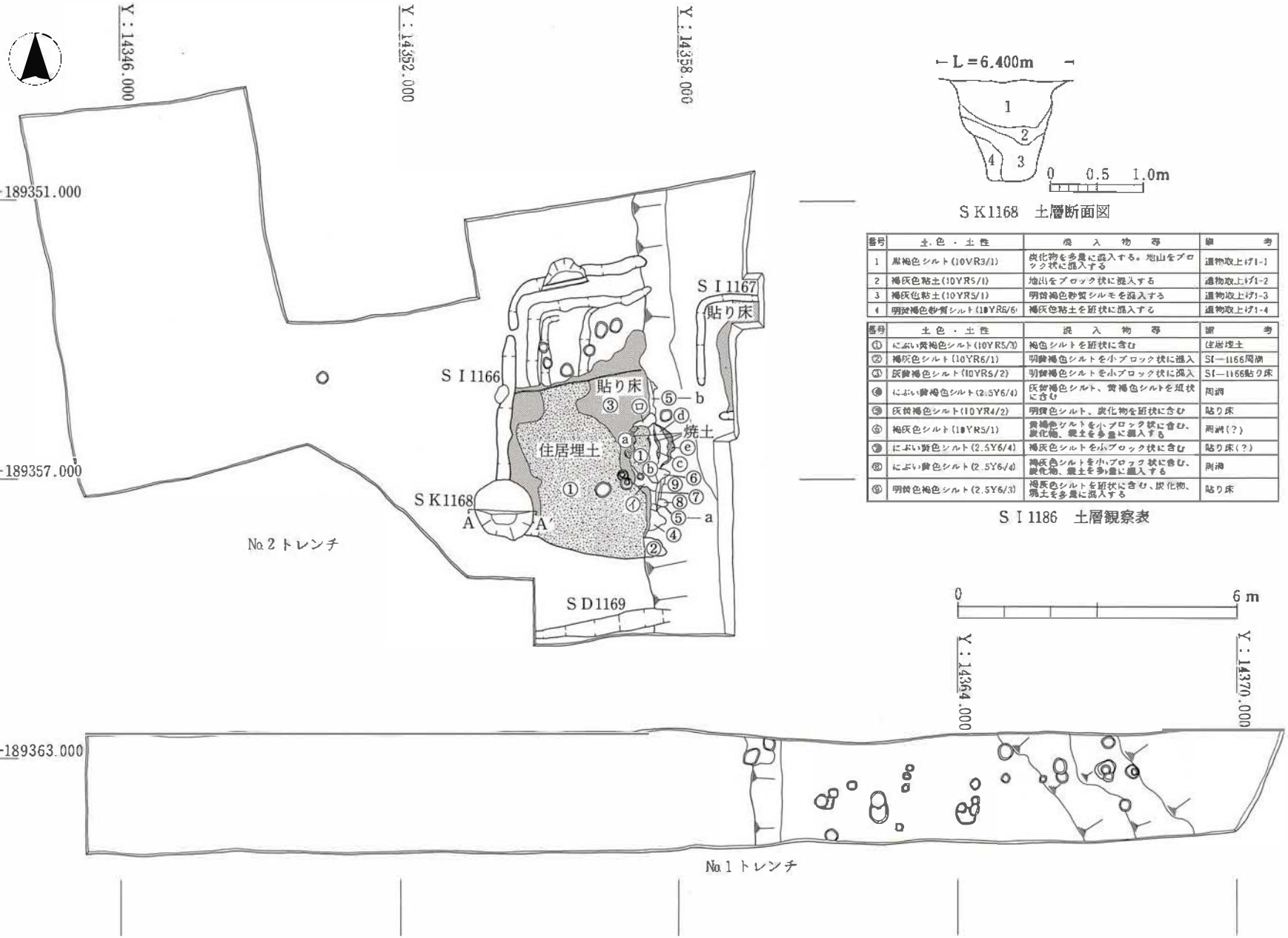
今回の調査対象地は、第10次調査区（現高崎中学校）の西側、丸山囲古墳群１号墳の南側の低丘陵上に位置する。調査に際し２カ所のトレンチを設定し、南側をNo.１トレンチ、北側をNo.２トレンチとした。９月７日、小雨の降るなかNo.１トレンチから重機を使用して表土剥離を行う。その結果、両トレンチとも西半分は現表土を除去すると明黄褐色の地山（岩盤）が現れた。一方、東半分では黒色粘質土層が広く堆積していたが、この層からはビニール袋やガラス瓶などが出土していることから重機を用いてその除去にあたる。９月８日から作業員を導入して遺構の検出作業を開始し、検出が終了したものから写真撮影を行う(～９月12日)。９月12日、本調査区の北側にある古墳時代中期の円墳といわれる丸山囲古墳群１号墳の周溝を確認するためNo.２トレンチの北西部を拡張したが、古墳に関連するような遺構、遺物は発見できなかった。９月19日、実測図作成のための基準点を設置し、翌日より、20分の１のスケールで実測図の作成を行う。また、発見した遺構の年代を把握するためにＳＫ1168土壙を掘り下げる（９月21日～28日)。その間、９月22日に集中豪雨に見舞われたが、９月28日に調査の全作業を終了した。



第５図　調査区位置図

3. 発見遺構と遺物

No.１トレンチから竪穴住居跡２棟、土壙１基、溝跡１条、No.２ト



SK1168　土層断面図

番号	土色・土性	混入物等	備考
1	黒褐色シルト(10YR3/1)	炭化物を多量に混入する。地山をブロック状に混入する	遺物取上げ1-1
2	褐灰色粘土(10YR5/1)	地山をブロック状に混入する	遺物取上げ1-2
3	褐灰色粘土(10YR5/1)	明黄褐色砂質シルトを混入する	遺物取上げ1-3
4	明黄褐色砂質シルト(10YR6/6)	褐灰色粘土を斑状に混入する	遺物取上げ1-4

番号	土色・土性	混入物等	備考
①	にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)	褐色シルトを斑状に含む	住居埋土
②	褐灰色シルト(10YR6/1)	明黄褐色シルトを小ブロック状に混入	SI−1166周溝
③	灰黄褐色シルト(10YR5/2)	明黄褐色シルトを小ブロック状に混入	SI−1166貼り床
④	にぶい黄褐色シルト(2.5Y6/4)	灰黄褐色シルト、黄褐色シルトを斑状に含む	周溝
⑤	灰黄褐色シルト(10YR4/2)	明黄色シルト、炭化物を斑状に含む	貼り床
⑥	褐灰色シルト(10YR5/1)	黄褐色シルトを小ブロック状に含む、炭化物、焼土を多量に混入する	周溝(?)
⑦	にぶい黄色シルト(2.5Y6/4)	褐灰色シルトを小ブロック状に含む	貼り床(?)
⑧	にぶい黄色シルト(2.5Y6/4)	褐灰色シルトを小ブロック状に含む、炭化物、焼土を多量に混入する	周溝
⑨	明黄色褐色シルト(2.5Y6/3)	褐灰色シルトを斑状に含む、炭化物、焼土を多量に混入する	貼り床

SI1186　土層観察表

第6図　遺構全体図

レンチから多数のpitを発見した。すべて地山での検出である。ＳＫ1168以外は遺構の堆積土を掘り下げていないため、出土遺物は整理用天箱で３個にどどまった。

＜竪穴住居跡＞

ＳＩ1166

No.１トレンチ東側で発見した住居跡である。上面での削平が著しく、中央から南辺にかけて堆積土が薄く残る程度であり、それ以外は床面と周溝が露出していた。東半部は後世の撹乱により大きく削り取られていた。それらが露出した部分の観察から本住居は数回の建て替えがあるとみられる。しかし上面での遺構検出に留めたため、古い時期の規模等については不明である。ここでは比較的規模が判明した新しい住居について報告する。住居の規模は南北5.2～6.6m、東西4.2m以上である。方向は西辺でみるとＮ－7°－Ｅである。南西隅でＳＫ1168と重複し、それより古い。貼り床は褐灰色粘質土を主体とし、径１～２cmの小ブロック状の明黄褐色土（地山）が混入している。北半部で住居に伴うと見られる柱穴を６個検出しているが、どの時期のものかは不明である。周溝は幅0.28～0.3m、深さ約0.3mであると推察され、北西隅で一端途切れる。カマドは、住居のやや南側の撹乱に壊された地点で炭化物と焼土が多量に混入する層を検出していることから、その部分と考えられる。遺物は堆積土から土師器甕、須恵器杯・高台付杯が出土している（図３）。

なお、本住居の古い時期のものについては、北半部において３時期の周溝を、東半部の断面においても３時期の周溝と床面および焼土層を確認した。いずれも本住居の床面に覆われている。焼土層は本住居カマドの下層で検出してたものである。本住居のものを含めると間層を挟み３層確認でき、その比高差は0.37mである。これらのことから本住居については同位置で３回の建て替えが行われていたことがうかがえるが、詳細は明らかでない。

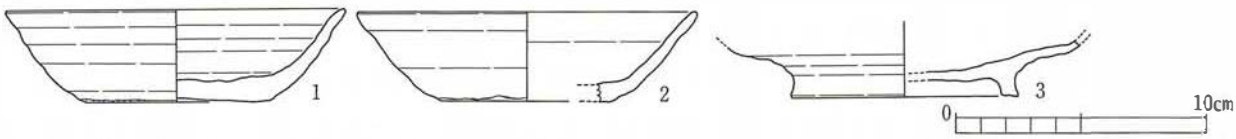
ＳＩ1167

ＳＩ1166の東側で発見した住居跡である。上面がほとんど削平されており、周溝と床面が露出していた。平面形は方形であり、規模は南北2.7m、東西1.3m以上である。方向は西辺でみるとＮ－4°－Ｗである。灰色粘質土を貼り床としている。周溝は幅0.15～0.2mで、南西隅は残存していない。カマドは今回の調査区内では発見できなかった。

＜土　壙＞

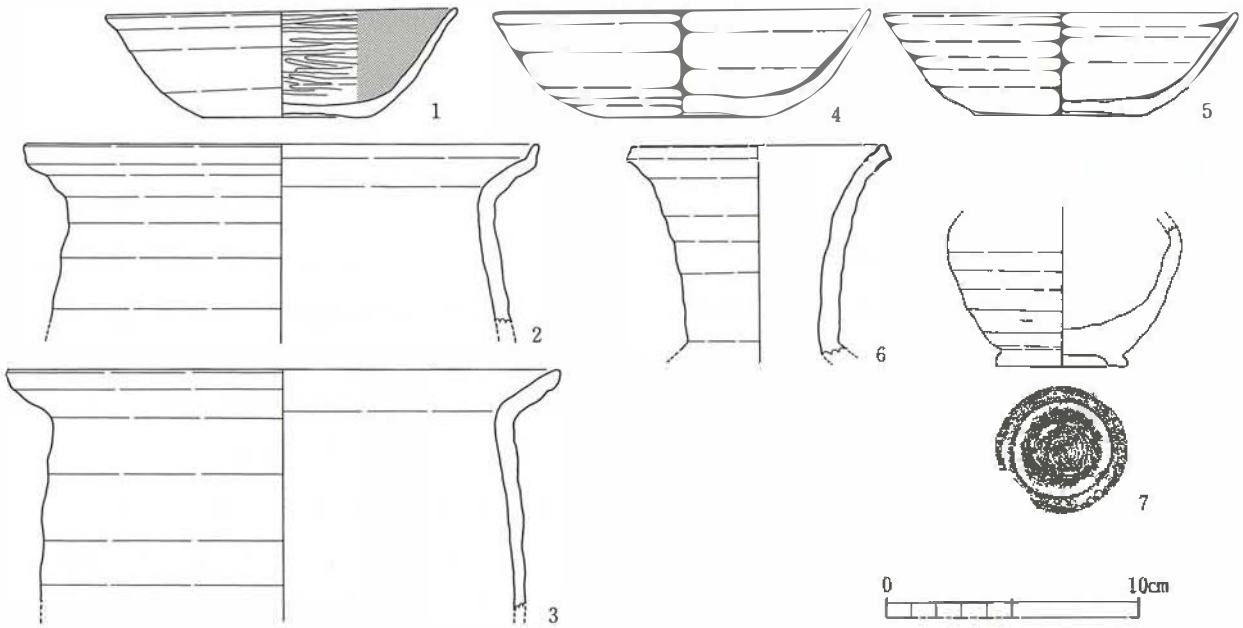
ＳＫ1168

ＳＩ1166の南西隅を壊して掘り込んでいる。上幅は最大2.62m、下幅は最大0.9m、深さ1.1mで、底面に凹凸は見られない。埋め土は４層に大別でき、第１層および第２層から土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶・瓦など多くの遺物が出土している（図４）。



番号	層位	種類	器種	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存
1	1層	須恵器	杯	体部ロクロナデ　底部回転糸切り後ナデ	ロクロナデ	(13.6)	7.4	(3.7)	3/5
2	1層	須恵器	杯	体部ロクロナデ　底部ヘラ切り	ロクロナデ	(13.6	(6.8)	(3.5)	1/3
3	1層	須恵器	高台付き杯	体部ロクロナデ　底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ		9.0		

第７図　ＳＩ1166出土遺物



番号	層位	種類	器種	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存
1	1層	土師器	杯	体部ロクロナデ　底部回転糸切り	ヘラミガキ後黒色処理	14.0	6.6	4.2	1
2	1層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	(20.4)			
3	1層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	(22.0)			
4	1層	須恵器	杯	体部ロクロナデ　底部回転糸切り	ロクロナデ	(15.0)	(7.0)	(4.3)	1/2
5	1層	須恵器	杯	体部ロクロナデ　底部ヘラ切り	ロクロナデ	(14.0)	(6.8)	(4.0)	2/5
6	1層	須恵器	長頸瓶	ロクロナデ	ロクロナデ	10.0			
7	1層	須恵器	瓶	体部回転ヘラケズリ後ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	ロクロナデ		5.2		

第8図　ＳＫ1168出土遺物

＜ピット群＞

No.2トレンチ東側のやや緑色にグライ化した岩盤上で28個検出した。平面形はほとんどが円形あるいは楕円形であり、柱痕跡を確認できたものが2個ある。今回の調査区内では明らかにできなかったが、これらのピット群が何らかの建物を構成する可能性も考えられる。

4.　遺構の年代

今回の調査は確認調査であり、基本的に遺構の堆積土は掘り下げていない。ここでは唯一掘り下げたＳＫ1168およびそれより古いＳＩ1166の年代について考えてみる。

ＳＫ1168から出土した遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、瓦がある。赤焼き土器は含まれていない(註１)。土師器はほとんどがロクロを使用している。杯類についてみると底部の切離し技法が判別できたものは、土師器では回転糸切りのものが３点、須恵器ではヘラ切りのものが１点、回転糸切りのものが３点である。いずれも再調整は認められない。このような土器の組み合わせは、白鳥良一氏による多賀城跡出土土器の分類（註２）のうち「Ｃ群土器」・「Ｄ群土器」に分類されているものと類似している。年代については「Ｃ群土器」が９世紀前半、「Ｄ群土器」が９世紀後半とされていることから、本土壙出土の土器についても概ね９世紀頃の年代が考えられる。従って本土壙についてもその頃の年代と考えておきたい。

ＳＩ1166から出土した遺物には土師器甕、須恵器杯・高台付杯がある。遺構の推積土を掘り下げていな

いため、すべて検出時にその上面から出土したものである。土師器甕は口縁部の破片で非ロクロ調整のものである。須恵器杯についてみると、底部の切離しがヘラ切り無調整のものが6点、回転糸切りのものが1点である。後者については切離し後底部周縁に手持ちヘラケズリを施している。高台付杯は回転ヘラケズリ後高台を貼付したものである。須恵器杯では切離し後手持ちヘラケズリを施すものは前途した多賀城跡出土土器のうち「C群土器」に少量、「E群土器」・「F群土器」に若干存在するとされている。本住居については「C群土器」・「D群土器」段階と見られるSK1168よりも古いこと、底部切離しがヘラ切り無調整の杯が多いことなどからも「C群土器」に類似すると考えられる。資料的には制約があるものの、本住居推積土から出土した土器も概ね「C群土器」とみることができる。また「C群土器」の年代が9世紀前半とされていることから、本住居の構築年代についてはそれ以前と考えておきたい。

5. まとめ

1. 今回の調査では、竪穴住居2棟、溝1条、土壙1基、多数の小ピットを発見した。
2. 遺構の年代は、SI1166が9世紀以前、SK1168が9世紀頃と考えられる。その他の遺構については不明である。

（註1） 本報告で言う赤焼き土器とは、宮城県多賀城跡調査研究所で須恵系土器と呼ばれているものと同一のものである。
（註2） 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要VII』1980

SI1166住居跡（東より）

V．第 16 次 調 査

1．　調査区の位置と地形

本調査区は、多賀城廃寺の北東約250m、ＪＲ東北本線の南側に所在している。ここは高崎丘陵の北斜面であり、西側から東側に向かって入り込む大きな谷の奥まった部分にあたる。

調査区の地形を細かく見ると、北半部が緩斜面、中央部が谷、南半部が急斜面と大きく区分され、起伏に富んだ地形となっている。南半部については、東側の一部に狭い平坦面と緩斜面もみられるが、大部分は北向きの急斜面であり、裾部との比高差は約９ｍである。中央部は二つの谷とそれらに挟まれた幅６～８ｍの狭い平坦面からなっている。北側の谷は調査区の東側から続いているものであり、南側の谷は調査区西端部からはじまっているものである。北半部は南側と西側へ広がる緩斜面である。なお、この緩斜面の北端部は東北本線で分断されているが、かつては小沢原遺跡の所在する浮島地区の丘陵に続いていたと考えられる。

2．　調査に至る経緯

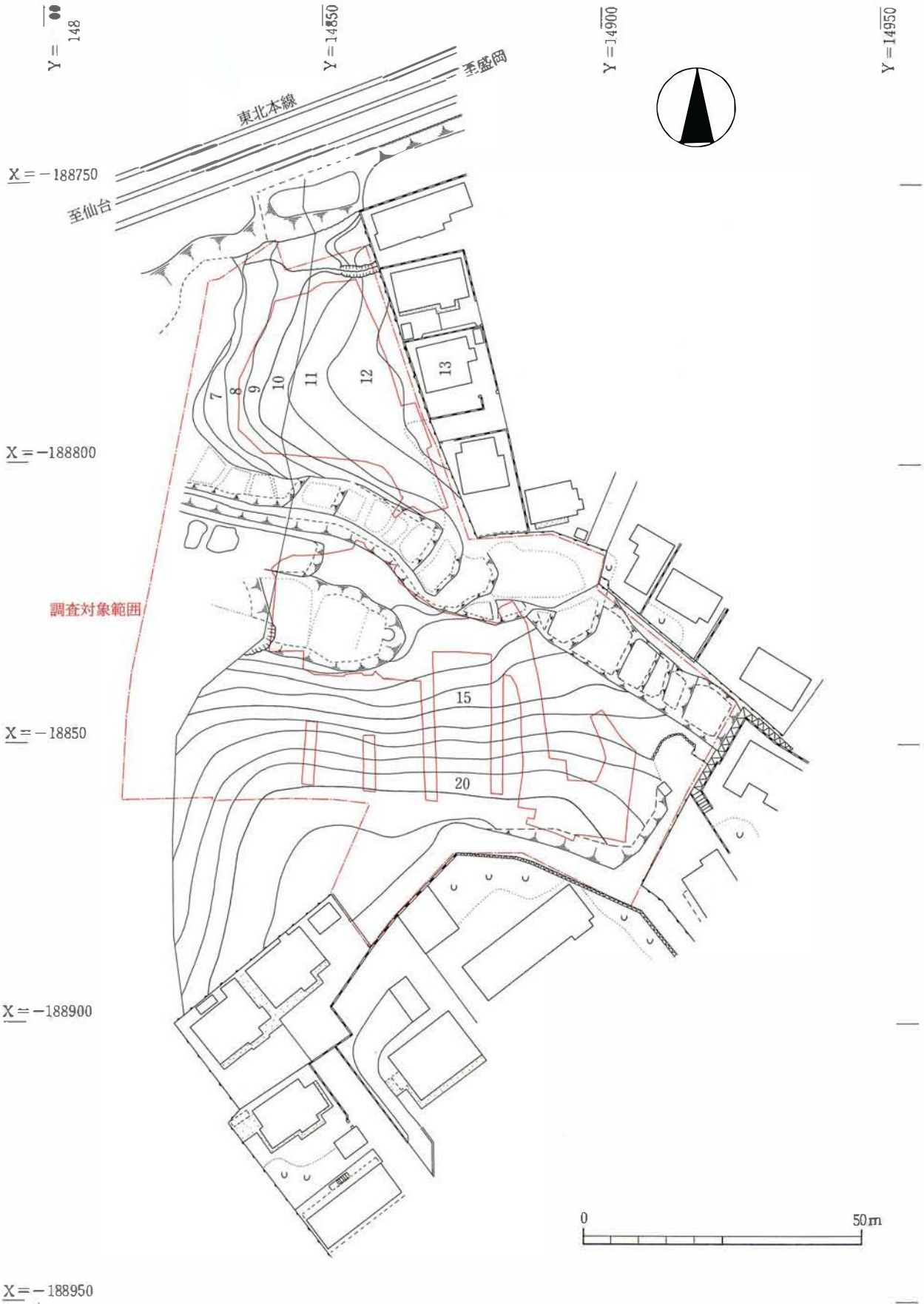
今回の調査は、都市計画道路（史跡連絡線）の代替地造成工事に係るものである。本件については、平成６年10月25日付で多賀城市土地開発公社から教育委員会へ事前協議書が提出された。開発計画によれば、対象地区南半部の丘陵北斜面については部分的に削平するが、その他の地点については盛り土し、既存の住宅地の高さに合わせる、というものであった。対象地区は、埋蔵文化財包蔵地として高崎遺跡の範囲に含まれるものの半分以上が急勾配の斜面や谷であり、現況から判断する限り遺構の存在する可能性は低いという予測がなされていたが、遺構が発見された場合については南半部は事前調査、その他の地点については確認調査を行うということで発掘調査を実施することとした。その結果、調査区全体から遺構が発見されたが数が少なく、しかも開発計画では対象地区全体に大規模な盛り土を行うことになっているため、現在の環境とは大きく変わることが予想された。よって、６月28日にすべて事前調査で対応することに調査方法を変更した。

現地は全体が山林となっているため、それらの伐採と対象地区外への搬出を待ち、６月19日から調査を開始した。

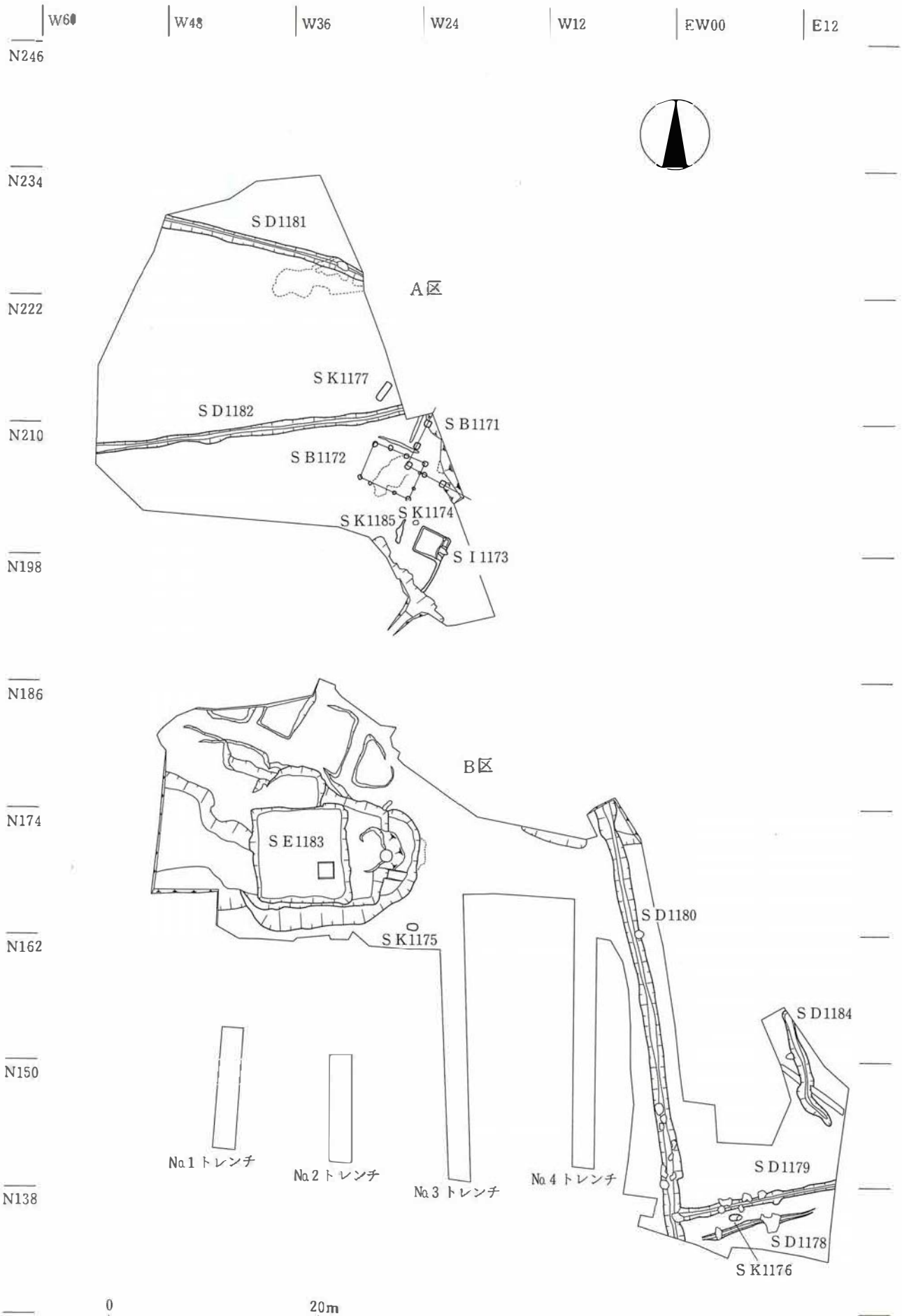
3．　調査方法と調査経過

前述のように、本調査区は起伏に富んだ地形となっている。以下、便宜的に北半部の緩斜面をＡ区、中央部の谷と南半部の丘陵斜面をＢ区として記述する。

Ａ区については全体にわたって表土を剥離し、遺構検出作業を行うこととした。一方、Ｂ区については南半部の急傾斜面にNo.１～４トレンチ、南半部東側の平坦面にNo.５トレンチ、中央部の狭い平坦面にNo.７トレンチをそれぞれ設定し、遺構が存在した場合その範囲についてのみ拡張していく方法を採った。遺構の実測方法は、遺構の分布が希薄であることおよび急斜面が存在することなどを考慮し、１/100のスケールによる平板実測と１/20のスケールによる遺り方実測を併用した。いずれの方法においても実測基準線は国土座標の方位に合わせている。


Y＝148
Y＝14850
Y＝14900
Y＝14950
至盛岡
東北本線
X＝－188750
至仙台
7
8
9
10
11
12
13
X＝－188800
調査対象範囲
15
X＝－18850
20
X＝－188900
0
50m
X＝－188950

第９図　調査区位置図


W60
W48
W36
W24
W12
EW00
E12
N246
N234
N222
N210
N198
N186
N174
N162
N150
N138
N126
SD1181
A区
SK1177
SD1182
SB1171
SB1172
SK1174
SK1185
SI1173
B区
SE1183
SK1175
SD1180
SD1184
SD1179
SD1178
SK1176
No.1トレンチ
No.2トレンチ
No.3トレンチ
No.4トレンチ
0
20m

第10図　遺構全体図

調査の経過については以下のとおりである。

6.19 器材搬入。B区№1～5トレンチ設定。作業員により№1～3トレンチの表土剥離。
6.20 前日の作業続行。
6.21 雨のため、重機により№3～5トレンチの表土剥離。№5トレンチにおいて東西溝2条、南北溝1条発見。A区表土剥離開始（～6.28）。
6.22 A区南東隅において竪穴住居1棟発見。
6.23 №5トレンチの南北溝周辺を拡張。№7トレンチを設定し、表土剥離開始（～6.29）。
6.26 №7トレンチ北側と南側の沢を部　掘削。北側の沢は浅く、表土下で灰白色火山灰ブロックを確認。
6.28 各トレンチの遺構検出作業が一応終了。この時点で事前調査で対応することに決定。
6.29 №7トレンチ北端部においてSD1180を覆う沢の堆積土を掘り上げる。
6.30 SD1180一部断ち割り。実測図作成のため基準点設定。
7. 6 SE1183完掘。重機による表土剥離終了。
7. 7 SD1181・1182堆積土掘り下げ開始。ベンチマーク移動。№7トレンチ西端部表土除去。SK1175堆積土1層を掘り下げ、焼土・炭化物層を検出。
7.10 SD1181・1182堆積土掘り上げ終了。SD1181東端部でそれより古い溝と土壙状の落ち込みを検出(後に風倒木と判明)。SE1183断面図作成。
7.12 SD1181・1182写真撮影。
7.13 SD1180検出作業。
7.14 SD1180堆積土掘り下げ（～7.17）。
7.17 №5トレンチ一部表土剥離。
7.18 SE1183セクションベルト除去。写真撮影。
7.19 SK1175堆積土掘り上げ。
7.20 SI1173堆積土掘り下げ開始。
7.21 B区東半部の清掃、写真撮影。SK1176・SD1184堆積土掘り下げ開始。
7.24 SD1178～1182平面図作成（100分の1）。SD1181・1182レベル計測。
7.25 SD1179とSD1180の関係を見るため一部拡張。一連の遺構であることを確認。
7.26 №1～4トレンチ第III層掘り下げ。№1・2トレンチ平面図作成。
7.27 SI1173堆積土断面図作成。
7.28 空中写真撮影。SE1183北側の竪穴状の落ち込みを掘り下げる。すべて近代以降のものと判明。B区東半部レベル計測。
7.31 SI1173セクションベルト除去。周溝堆積土を掘り下げる。SK1175周辺を拡張。
8. 1 A区南端部の谷の推積土掘り下げる（～8.2）
8. 2 SE1183東側のIIIb層下より灰白色火山灰ブロックを検出。
8. 4 お盆休みに備えて現場封鎖。
8. 5 お盆休み（～16）。
8.17 SI1173遺物出土状況写真撮影。SE1183石敷きを清掃し、写真撮影。
8.18 SI1173カマド周辺精査。SK1174・1177堆積土掘り上げて断面図作成。
8.21 SI1173主柱穴検出作業、発見できず。
8.22 SI1173遺物取り上げ。
8.23 SI1173の北でSB1171・1172を発見。
8.24 SI1173、SB1171・1172平面図作成。
8.25 SI1173、SB1171・1172断面図作成。
8.28 SB1171・1172の柱穴断面図作成後、埋土を掘り上げる。調査終了。

4. 層　序

A区は表土の下が直接地山になっている。一方、B区では丘陵頂部に近い南東隅と丘陵の裾にあたる中央部において堆積層が認められた（第22図、図版2右下参照）。

I層　現在の表土である。

II層　調査区南東隅に分布する褐色（10YR4/6）砂質土である。III層の上に直接堆積しており、厚さは約8cmである。西側から東側へわずかに傾斜している。SD1180は本層上面から掘り込んでいる。

IIIa層　調査区南東隅に分布する暗褐色(10YR3/4)砂質土である。地山の上に直接堆積しており、II層に直接覆われている。厚さは15～30cmである。10世紀以降の土器片が混入している。

IIIb層　調査区中央部の斜面裾部に分布する暗褐色（10YR3/3）砂質土である。現代の盛土の下で確認したものであり、地山の上に直接堆積している。上面には褐色土小粒が多く混入しているがそれ以外は均質である。部分的な断面観察によると地山面に堆積した10世紀前半の灰白色火山灰ブロックを直接覆っている。厚さは約25cmである。

IV層　調査区南東隅に分布する黄褐色（10YR5/4）土である。地山の漸移層かと考えられる。

IIIa層とIIIb層には直接的および間接的重なりが認められない。しかし、いずれも地山直上に堆積して

いること、土性と色調が類似していること、Ⅲb層上面に混入している褐色土がⅡ層に類似していることなどから両者は層位的に対応関係にある可能性が高いと考えられる。10世紀以降の旧表土と見ておきたい。

また、谷の堆積層の状況を知るため、北の谷（A区とB区のほぼ中間）を部分的に掘り下げたところ、現在の表土の下に10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰の小ブロックを含む亜泥炭層があり、その下は岩盤であった。A区南端部においては谷の立ち上がりが認められ、地山ブロックを含む黄褐色砂質土が堆積していた。一方、南の谷については約7.5mにわたって堆積層の断面観察を行った。底面には、地山の崩壊土やそれらを多く含む厚い層があり、南北両壁方向から中央部に向かって傾斜して堆積している。中央部よりやや北壁に近いところではその上に灰白色火山灰の二次堆積層があり、それを挟るように灰白色火山灰の小ブロックを含む亜泥炭層が堆積している（第27図参照）。

5. 発見した遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、古代の掘立柱建物2棟、竪穴住居1棟、土壙3基、溝6条、近代の井戸1基、年代不明の土壙2基である。以下、地区ごとに説明する。

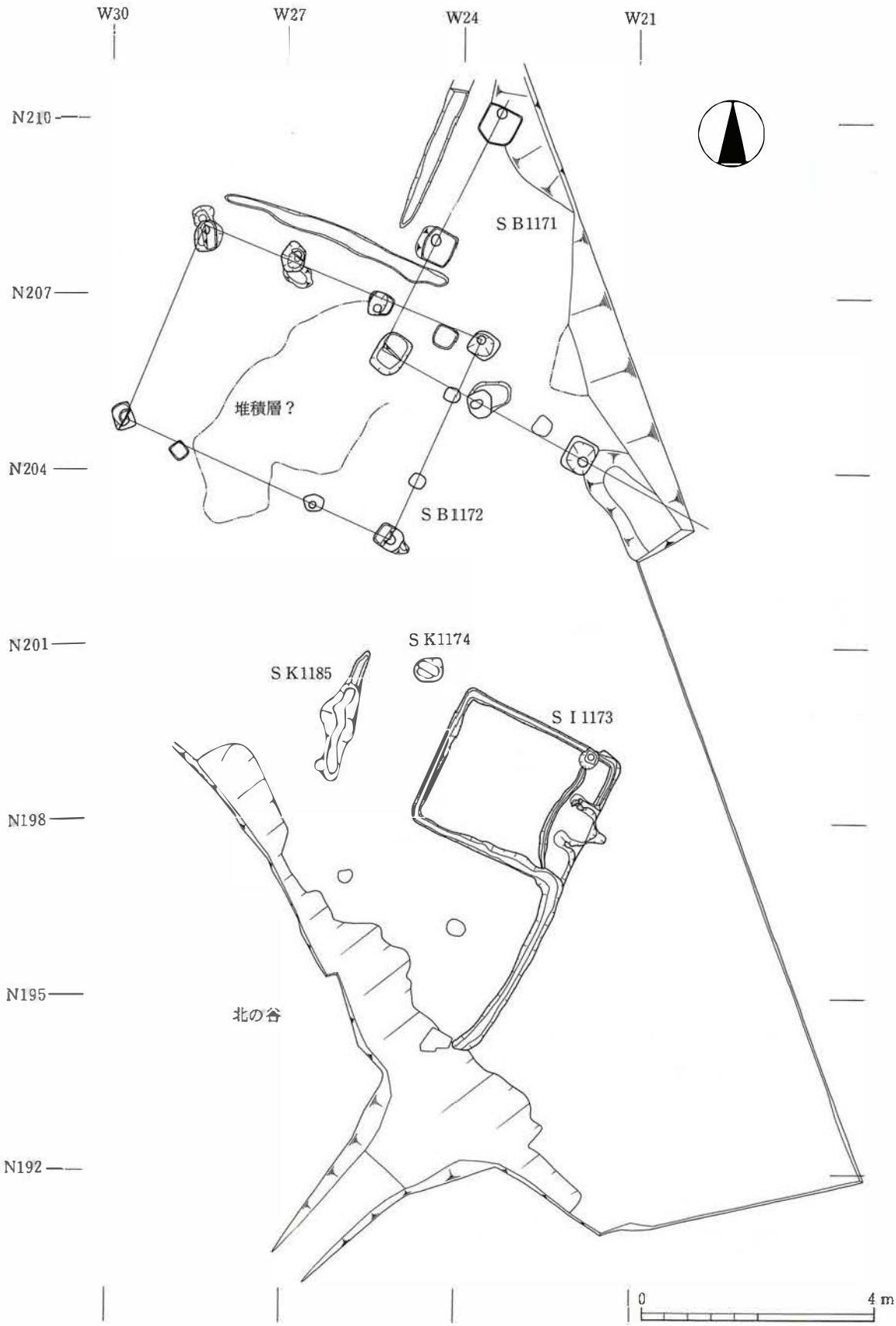
A区

(1) SB1171掘立柱建物跡

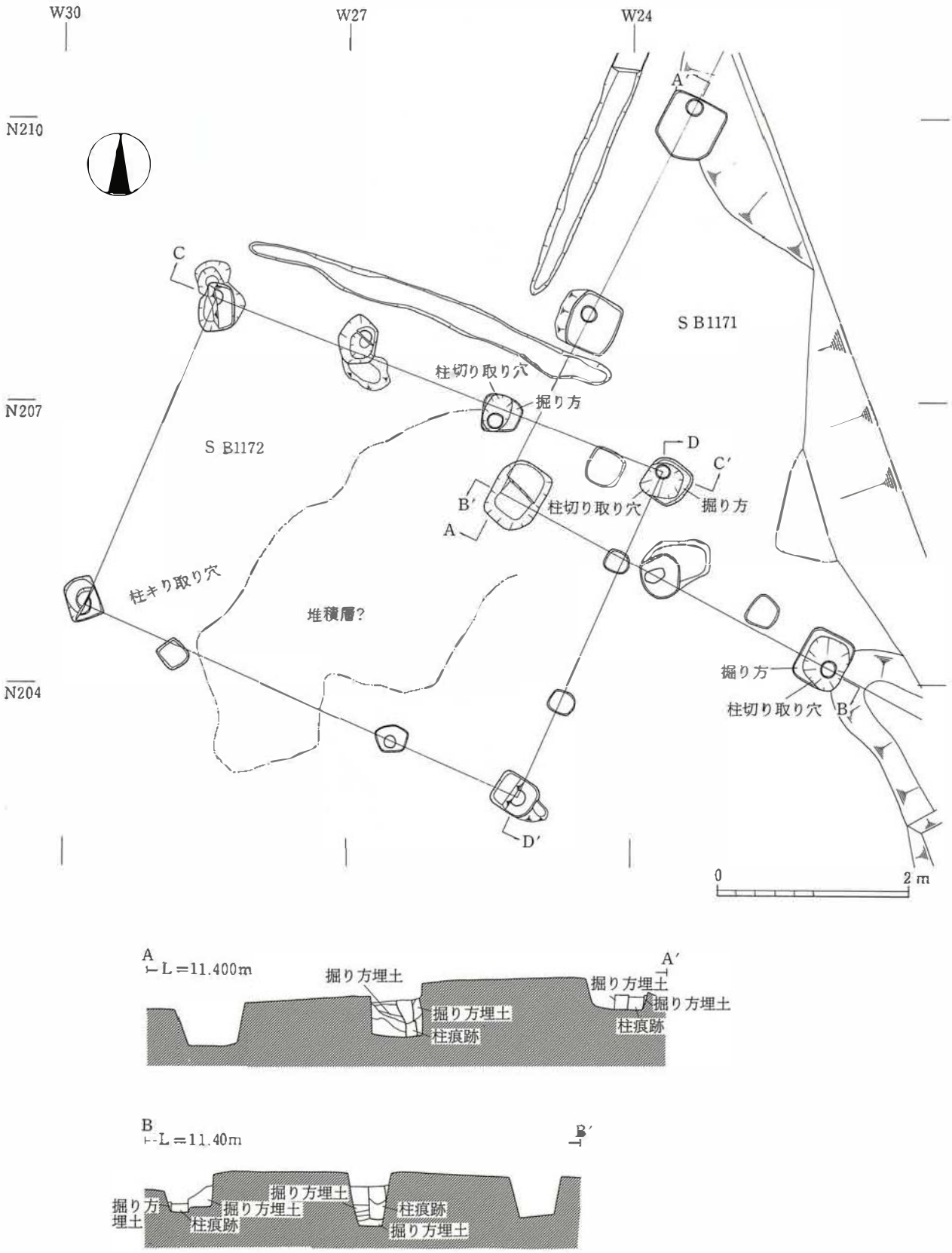
SB1171は中央部東壁際の地山上で発見した掘立柱建物跡である（第11・12図）。調査区外東側へ延びているため、東西柱列、南北柱列とも2間分確認したにすぎない。検出した5個の柱穴の内4個の柱穴で柱痕跡を確認している。東西柱列西より2間目の柱穴では柱切り取り穴を確認している。SB1172と重複しているが、柱穴の直接的な切り合いがないため新旧関係は不明である。本建物の方向は、南北柱列で見ると北で26度59分東へ偏しており、東西柱列で見ると東で28度32分南へ偏している。柱間は、南北柱列が南より約2.1m、2.45mであり、東西柱列が西より約1.7m、2.07mである。柱穴の平面形は、東西柱列中央のものが円形であるほかは長方形を基調としている。規模は、大きなもので長辺70cm、短辺55cm、小さなもので長辺55cm、短辺50cmである。柱は、柱痕跡より径16〜19cmである。南北柱列の南から1間目と2間目および東西柱列の西から2間目の柱穴では柱痕跡が柱穴底面に接しているが、東西柱列の西から1間目の柱穴では底面から約10cm上の位置にある。掘り方埋土は、南北柱列の南から1間目と2間目および東西柱列の西から2間目の柱穴は単層あるいは一方向から斜めに堆積しているが、東西柱列の西から1間目の柱穴は互層になっている。南北柱列の底面レベルを比較すると、南端部の柱穴はそれより2間目の柱穴より0.4m低い。遺物は、東西柱列西より2間目の柱穴の掘り方埋土から土師器杯と須恵器甕の体部破片がそれぞれ1点、切り取り穴から須恵器瓶の体部破片が1点出土している。いずれも特徴的な部分がないため年代は不明である。

(2) SB1172掘立柱建物跡

SB1172は桁行3間、梁行1間の掘立柱建物跡である（第11〜13図）。中央部東壁付近の地山面で発見した。柱穴はすべて検出しており、南側柱列西より1間目の柱穴をのぞくすべての柱穴で柱痕跡を確認している。また、北側柱列東端および東から1間目の柱穴で柱切り取り穴を確認している。本建物の方向は、北側柱列で見ると東で21度6分南へ、南側柱列で見ると東で23度45分南へ偏している。また、東妻で見ると北で23度35分東へ、西妻で見ると北で22度45分東へ偏している。桁行については、北側柱列で総長5.08

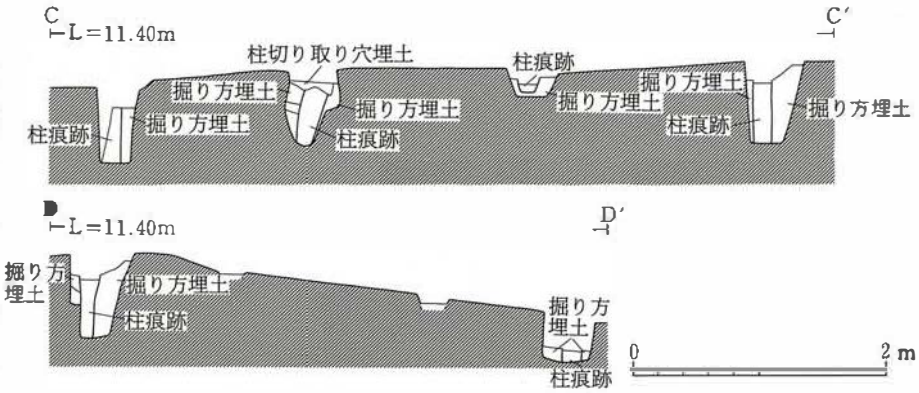


第11図　A区南半部の遺構



第12図　ＳＢ1171・1172平面図及びＳＢ1171柱穴断面図

m、柱間は西から1.62m、1.66m、1.85mであり、南側柱列で総長5.02m、柱間は西から約1.1m、約2.5m（2間分で3.56m）、1.47mである。梁行については、東妻で3.80m、西妻で3.57mである。柱穴の平面形は、楕円形に近い形状のものもあるが多くは長方形を基調としている。規模は、大きいもので長辺50cm、短辺40cm、小さいもので長辺30cm、短辺25cmである。柱は、柱痕跡より径16cmである。掘り方埋土はすべて単層である。柱穴の底面レベルを比較すると、北側柱列は西端が東端より約15cm低く、東妻は南端が北端より約20cm低い。なお、東妻で柱筋上に2個の小柱穴を発見した。柱痕跡を確認していないため、その中心に柱位置を想定すると、両者の柱間は約1.6mであり、両側柱列との柱間はいずれも約1.1mである。遺物は、掘り方埋土から須恵器杯とロクロ調整を施した土師器甕の口縁部破片が各1点出土している。



第13図　ＳＢ1171柱穴断面図

(3)　ＳＩ1173竪穴住居跡

ＳＩ1173は南半部の地山面で発見した竪穴住居跡である（第11・14図）。南西隅は床面まで削平されているが、それ以外は残存状態が良好であり、カマド、カマド前方溝、周溝、外延溝などの施設を検出した。平面形は東西にやや長い長方形であり、規模は長辺2.90～2.97m、短辺2.45～2.50mである。壁高は北東隅で36cmである。

カマド：東壁中央にあり、左右の側壁および煙道の一部が残存している。側壁の外側で計ると90～95cm、内側で計ると45～50cmであり、高さはわずか14cmを残すのみである。側壁はにぶい黄橙色土を貼り付けて構築しており、焚き口に近い部分では石を詰め込んでいる部分もある。なお、東辺の周溝は北側壁の下までのびており、カマドは周溝掘削後に構築されたことが明らかである。

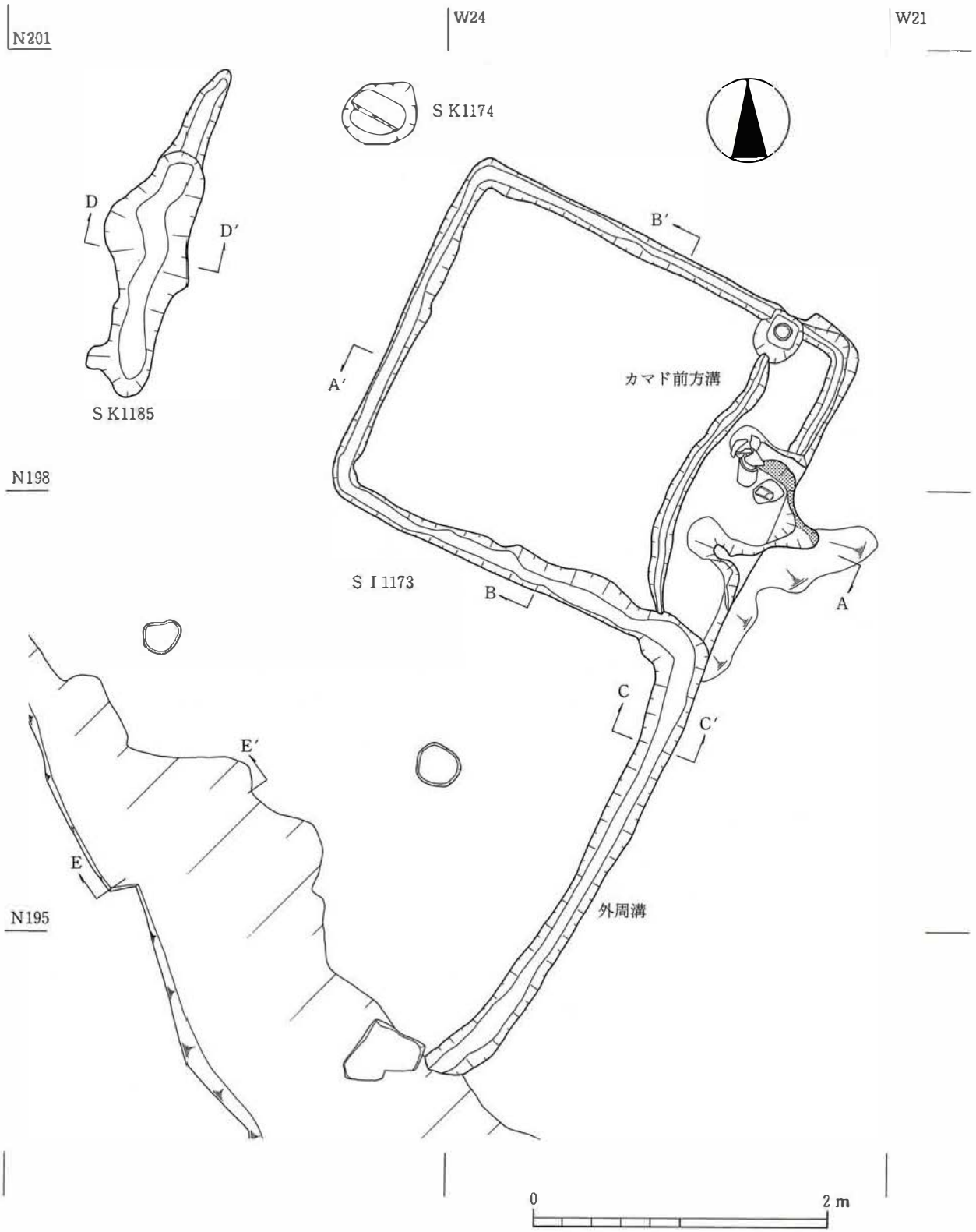
カマド前方溝：北壁の周溝から南壁の周溝にかけて延びる南北溝である。カマド前方で西側に膨らむように緩やかに湾曲しており、規模は幅9～15cm、深さ3～5cmである。底面は北側から南側に傾斜しており、比高差は16cmである。本溝は4b層に覆われている。

周溝：東辺のカマドおよびその南側をのぞく各壁直下に設けられており、南壁の周溝は本住居南東隅で外延溝に連結している。規模は、東・西・北辺では幅約15cmであるが、南辺では南東隅にむかって次第に幅が広くなっており、27cmになっている。各隅の底面レベルを比較すると、北東・北西隅より南東・南西隅が約15cm低くなっている。

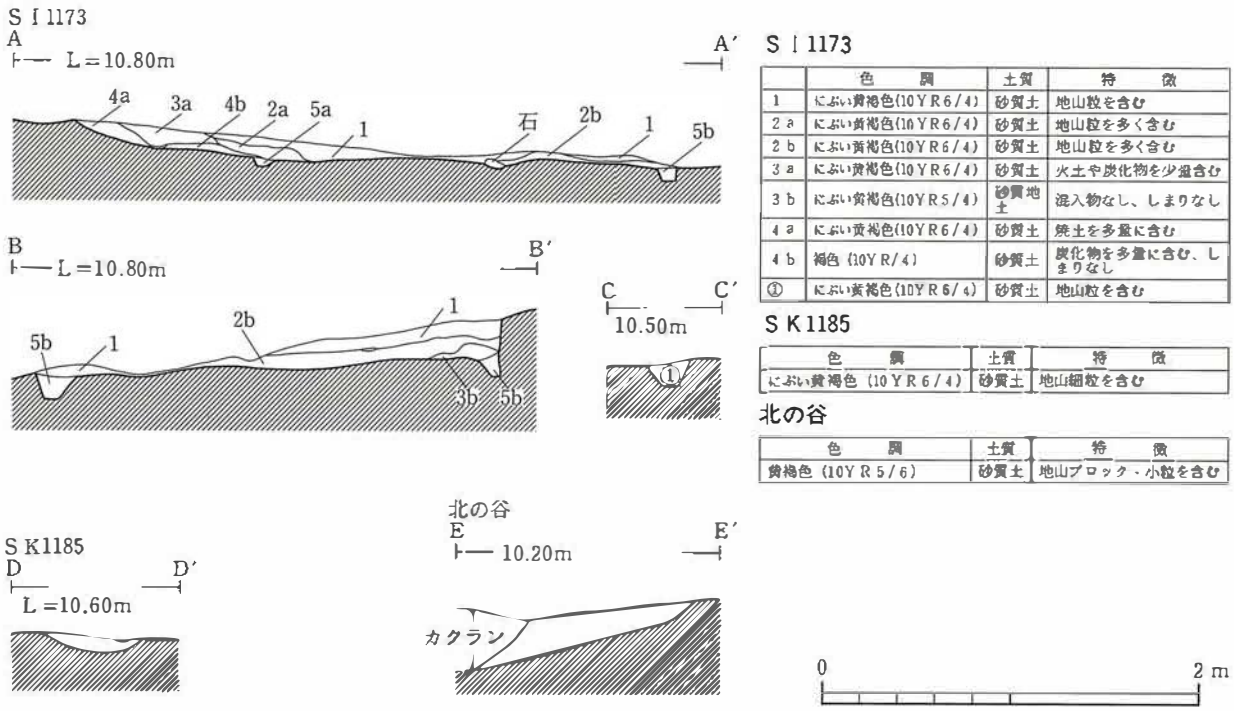
外延溝：住居南東隅から谷にかけて南北3.3mにわたって検出した。規模は、幅20～30cm、深さは10～20cmである。底面は谷に向かって傾斜しており、住居南東隅と谷に接する部分との比高差は40cmである。

堆積土：7層に細分することができる。4a層は焼土を多量に含むカマド内堆積土である。4b層はカマドの前方と側壁北側にのみ分布している炭化物層であり、床面上に直接堆積していることから住居機能時に形成されたものと見られる。3a層は4a層上に直接堆積しており、カマドの崩壊土と見られる。1・2a・2b・3b層は住居廃絶後の堆積層と考えられる（第15図）。

遺物の出土状況：遺物は土師器杯・高台杯・甕、須恵器杯・蓋・甕・瓶、灰釉陶器碗、平瓦、丸瓦、羽口、スラグ、砥石が出土している(表1)。その内、カマドおよびその周辺から完形もしくはそれに近い状態の土師器杯7点と土師器甕が出土している。カマド崩壊土(3a層)から出土したものとカマド内堆積土(4



第14図　SI1173、SK1174・1185平面図



S I 1173

	色　調	土質	特　徴
1	にぶい黄褐色(10YR6/4)	砂質土	地山粒を含む
2a	にぶい黄褐色(10YR6/4)	砂質土	地山粒を多く含む
2b	にぶい黄褐色(10YR6/4)	砂質土	地山粒を多く含む
3a	にぶい黄褐色(10YR6/4)	砂質土	火土や炭化物を少量含む
3b	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質地土	混入物なし、しまりなし
4a	にぶい黄褐色(10YR6/4)	砂質土	焼土を多量に含む
4b	褐色 (10YR/4)	砂質土	炭化物を多量に含む、しまりなし
①	にぶい黄褐色(10YR6/4)	砂質土	地山粒を含む

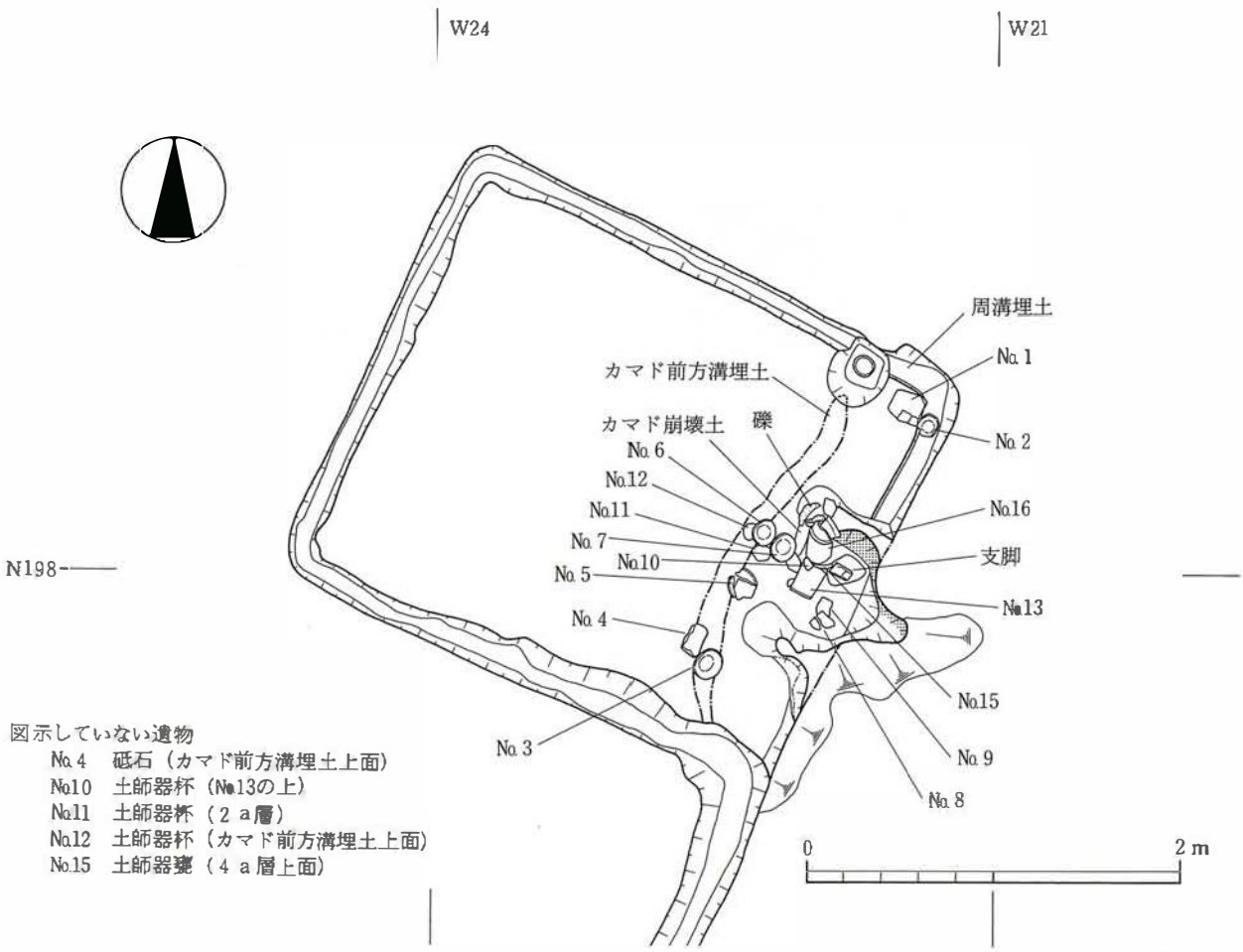
S K1185

色　調	土質	特　徴
にぶい黄褐色 (10YR6/4)	砂質土	地山細粒を含む

北の谷

色　調	土質	特　徴
黄褐色 (10YR5/6)	砂質土	地山ブロック・小粒を含む

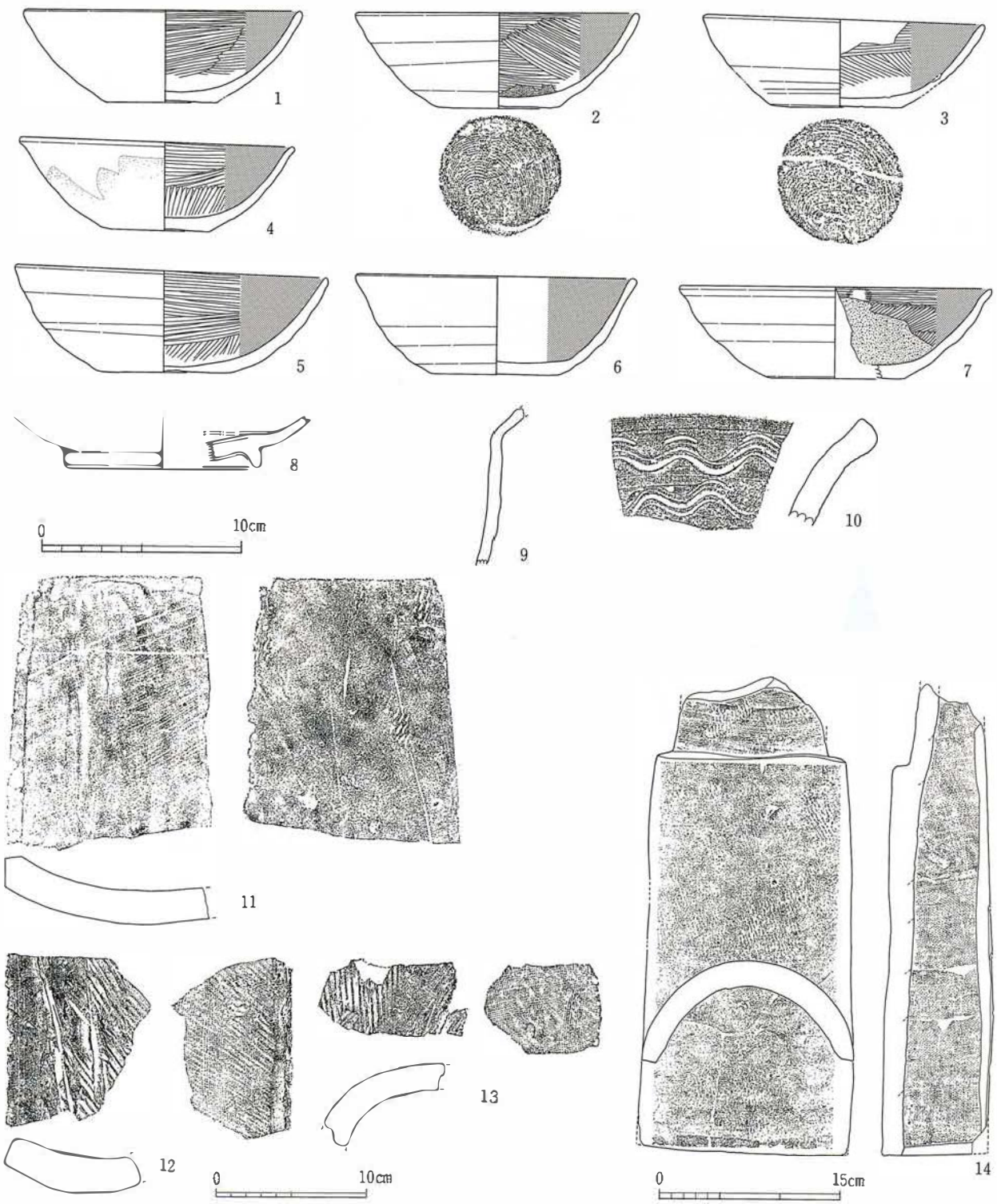
第15図　S I 1173、S K1185断面図



図示していない遺物
No.4　砥石（カマド前方溝埋土上面）
No.10　土師器杯（No.13の上）
No.11　土師器杯（2a層）
No.12　土師器杯（カマド前方溝埋土上面）
No.15　土師器甕（4a層上面）

第16図　S D1173遺物出土状況

a層）上面から出土したものが接合して1点、カマド内堆積土（4a層）から1点、カマド脇の炭化物層（4b層）上面から2点、カマド前方溝堆積土上面から2点、周溝堆積土上面から1点それぞれ出土している。また、土師器甕はカマド内堆積土（4a層）およびその上面から出土している（第16・17図、表1）。これらは出土層位が異なるが、①平面的な分布状況、②カマド崩壊土やそれを多く含む層（2a層）に直接覆われるという層位的関係から、周溝およびカマド前方溝の埋没からカマド崩壊までの時間幅の中にお



第17図　S I 1173出土遺物

ＳＩ1173出土遺物観察表

番号	遺物名	層位	特徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	取り上げNo	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	周溝埋土上面	【外面】体部：ロクロナデ、底部：回転糸切り 【内面】ヘラミガキ，黒色処理	(13.9)	5.4	4.6	No 2	R－2	
2	土師器・杯	4ｂ層上面	【外面】体部：ロクロナデ、底部：回転糸切り 【内面】ヘラミガキ、黒色処理、底部：墨書文字	14.2	5.6	4.8	No 7	R－1	図版３－１
3	土師器・杯	4ｂ層上面	【外面】体部：ロクロナデ、底部：回転糸切り 【内面】ヘラミガキ、黒色処理	14.0	5.6	4.4	No 5	R－4	
4	土師器・杯	カマド前方周溝埋土上面	【外面】体部：ロクロナデ、底部：回転糸切り 【内面】ヘラミガキ、黒色処理	13.7	4.9	4.4	No 6	R－5	
5	土師器・杯	カマド前方周溝埋土上面	【外面】胴部：ロクロナデ、底部：回転糸切り 【内面】ヘラミガキ、黒色処理	15.6	6.3	5.0	No 3	R－3	図版３－２
6	土師器・杯	３ａ層＋４ａ層上面	【外面】体部：ロクロナデ、底部：切り離し不明 【内面】摩滅、黒色処理	13.8	5.1	4.9	No 8・9	R－6	
7	土師器・杯	４ａ層	【外面】体部：ロクロナデ 【内面】ヘラミガキ、黒色処理、油煙付着、燈芯痕跡あり	(15.5)	(6.9)	4.5		R－7	
8	灰釉陶器・碗	２層	【外面】体部・底部：回転ヘラケズリ→高台貼付 【内面】ロクロナデ、灰釉が点々と付着		(9.8)			R－19	図版３－４
9	土師器・甕	５層	【外面】体部：ロクロナデ 【内面】口縁部付近：ヨコナデ、体部：ヨコナデ					R－27	
10	須恵器・甕	外延溝埋土	【外面】ロクロナデ→波状沈線 【内面】ハケメ					R－23	

	遺物名	層位	技法	分類	特徴	取り上げ番号	登録番号	図版番号
11	平瓦	４ａ層上面	桶巻き作り	ＩＡ－ａ類	【凹面】糸切り痕→第１次布目→ナデ→凸部台座痕、【凸面】縄叩き目→ナデ	No13	R－56	
12	平瓦	２層	桶巻き作り		【凹面】糸切り痕→第１次布目→第２次布目、【凸面】平行叩き目→ナデ		R－38	
13	丸瓦	表面直上	粘土板巻き作り	ＩＡ－ｂ類	【凹面】第１次布目→第２次布目、【凸面】平行叩き目		R－62	
14	丸瓦	表面直上＋４ａ層上面	粘土紐巻き作り	ⅡＢ－ａ類	【凹面】粘土紐痕・布目、【凸面】縄叩き目→ロクロナデ	No 1・16	R－37	

表１　ＳＩ1173出土遺物集計表

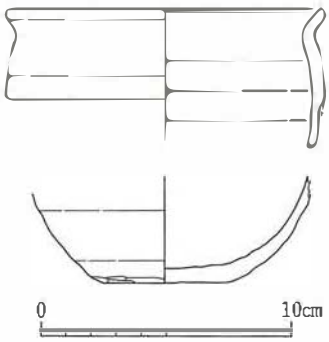
器種	部位	成形・調整	1層	2層	3ａ層	4ａ層上面	4ａ層	4ｂ層上面	4ｂ層	カマド構築土	カマド前方周溝埋土上面	周溝埋土上面	周溝埋土	床面直上	外延溝	合計
土師器・杯	口縁部		3	11	0	0	6	0	1	0	0	0	3	0	0	24
〃	体部		8	21	0	0	6	0	2	0	0	0	9	1	0	47
〃	底部	糸切り	4	5	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	12
〃	〃	糸切り→回転ヘラケズリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
〃	〃	糸切り→手持ちヘラケズリ														
〃	口・体・底	摩滅	2	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
〃	口～底	糸切り	0	0	※1	※1	1	2	0	0	2	1	0	0	0	8
〃	〃	丹調整	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(小計)			17	55	1	1	13	2	3	0	3	1	13	2	1	112
土師器・高台杯	底部		0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2
土師器・甕	口縁部	ロクロ	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	5
〃	〃	非ロクロ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〃	〃	摩滅	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〃	体部	ロクロ	0	1	0	0	4	0	1	0	0	1	0	0	0	7
〃		ロクロ→ヘラケズリ	0	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	4
〃		ヘラケズリ	5	9	1	0	7	0	2	0	0	0	1	0	0	25
〃		摩滅	3	20	0	0	2	0	3	0	0	0	1	0	0	29
〃	底部	不明・摩滅	7	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	9
(小計)			19	32	1	1	15	0	7	1	0	1	4	0	0	83
須恵器・杯	口縁部		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〃	体部		2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
〃	底部	ヘラ切り	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
(小計)			3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
須恵器・蓋	体部		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
須恵器・甕	口縁部		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
〃	体部		0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
〃	底部		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
須恵器・瓶	口縁部		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
〃	体部		1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4
〃	底部		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
灰釉陶器・碗	口縁部		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〃	底部		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
平瓦			0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
丸瓦			0	2	0	★1	1	0	1	0	0	0	0	★3	0	8
瓦（その他）			0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
羽口			0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
スラグ			0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
砥石			0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
合計			40	105	2	4	29	2	11	1	5	2	18	5	2	226

（★・※は接合関係を示す）

さまるものと考えられ、一括性のある資料と理解することができる。完形品及びそれに近いという遺存状態もそれを裏付けるものと見ることができよう（註１）。

(4)　ＳＫ1174土壙

ＳＫ1174は南半部の地山面で発見した土壙である(第14図)。平面形は一部角ばっているがおおよそ楕円形であり、壁はほぼ垂直である。規模は、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.3mである。遺物は、土師器小型甕が出土している(第18図)。口縁部から体部にかけての破片であり、直接接合しないが周辺の第Ｉ層から出土した底部破片とは器形、器厚、胎土、色調などから同一個体の可能性が高い。口縁部から体部にかけて内外面をロクロ調整している。第Ｉ層出土の底部破片は外面底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリを施しており、ロクロからの切り離しは回転糸切りである。口縁部から体部にかけての破片が土壙内か



遺物名	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
土師器・甕	埋土	【外面】口縁・体部：ロクロナデ、底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(12.8)	4.9		R−12

第18図　ＳＫ1174出土遺物

ら出土し、その底部と見られる破片が第Ⅰ層より出土していることから、倒位あるいは横位の状態で土壙内にあったことが推定される。

(5)　ＳＫ1185土壙

ＳＫ1185は南半部の地山面で発見した土壙である（第14･16図）。平面形は南北に長い溝状であり、不整形である。底面は北半部より南半部が深くなっており、その境目は段になっている。壁は概ね緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸2.3m、短軸0.2〜0.6m、深さ0.1mである。本土壙の方向は、長軸方向で計ると北で約28度西に偏している。遺物は、土師器杯・甕、鉄滓が出土している。土師器杯は底部破片が３点あり、回転糸切り無調整のものと回転ヘラケズリを施したものが各１点ある。甕は口縁部破片が１点あり、ロクロ調整を施したものである。

(6)　ＳＫ1177土壙

ＳＫ1177は中央部東壁際の地山面で発見した土壙である（第10図）。平面形は長方形であり、南北に長い。壁は、南辺が緩やかであるがその他は急に立ち上がっている。底面は平坦である。規模は、長辺2.0m、短辺0.55〜0.7m、深さ0.2〜0.25mである。堆積土は地山と近似した浅黄色砂質土である。遺物は出土していない。

(7)　ＳＤ1181溝跡

ＳＤ1181は北半部の地山面で発見した東西溝である（第10図）。調査区東壁付近において風倒木痕と重複しており、それより新しい。両端とも調査区外へ延びており、確認した長さは約20mである。調査区東壁付近でやや南側に湾曲しているがそれ以外は直線的に延びており、方向は直線的な部分でみると東で約14度南に偏している。幅は0.8〜1.2mであり、深さは13〜47cmである。底面は東側から西側に向かって傾斜しており、比高差は約3.4mである。遺物は１層から土師器甕、須恵器甕、赤焼き土器杯が出土している。

(8)　ＳＤ1182溝跡

ＳＤ1182は中央部の地山面で発見した東西溝である（第10図）。両端とも調査区外へ延びており、確認した長さは約30mである。直線的に延びており、方向は東で約７度北に偏している。幅は0.7〜1.2mであり、深さは６〜59cmである。底面は東側から西側に向かって傾斜しており、比高差は約4.5mである。

遺物は１層から須恵器杯、赤焼き土器高台杯が出土している。須恵器杯は底部が回転ヘラケズリ調整されたものである。

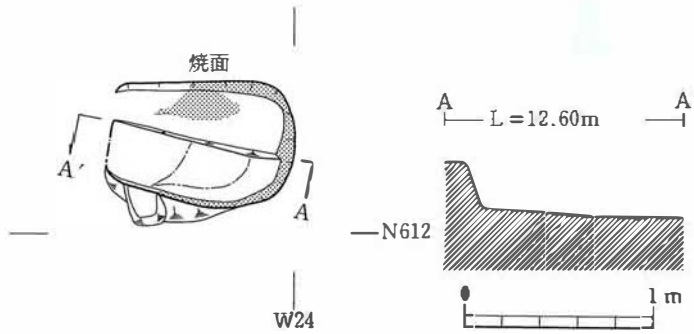
Ｂ区

(1)　ＳＫ1176土壙

ＳＫ1176は南東部の地山面で発見した土壙である(第21図)。地山の石に接して掘り込まれており、その部分を除くと、平面形は概ね楕円形である。壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長径1.2m、短径0.5～0.6m、深さ0.3mである。堆積土はにぶい黄褐色土の単層である。本土壙は、表上を剝離した時点で既に遺物の一部が露出しており、上面は削平を受けている可能性ある。遺物は、土師器高台杯、赤焼き土器杯・高台杯、丸瓦が出土している。土師器高台杯は床面上から、その他はそれよりやや浮いた状態で出土しているが、時期差を示すものとは見られない。赤焼き土器高台杯は細かく割れて出土したため接合しないがほぼ一個体分であり、赤焼き土器杯は口縁部が約３分の１欠損している。土師器高台杯は内外面とも器表が剝落しているが完形である。

(2)　ＳＫ1175土壙

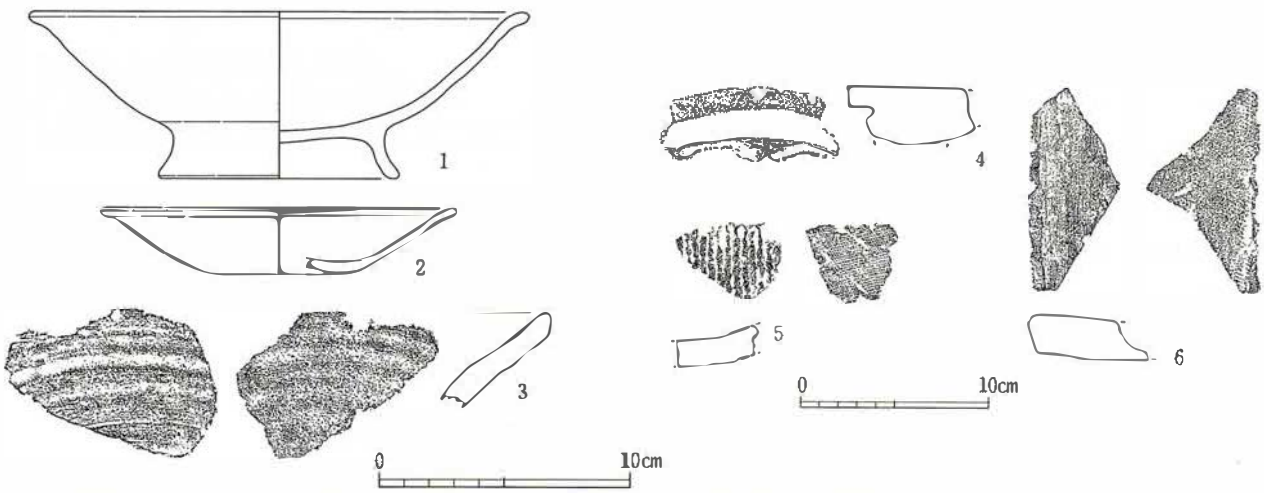
ＳＫ1175は西半部北斜面の地山面で発見した土壙である(第19図)。西側が削平を受けている。平面形はおおよそ長方形であり、隅は丸くなっている。壁は垂直に立ち上がっており、底面は平坦である。南・北・東辺の壁と底面の一部が焼けて硬化し、赤色に変化している。底面付近には炭化物層や炭化物を多く含む層があり、その上に地山ブロックを多く含む層が厚く堆積している。規模は長辺約1.0m、短径0.55m～0.65m、深さは最も深い東辺付近で0.24mである。



第19図　ＳＫ1175平面図・断面図

(3)　ＳＤ1184溝跡

ＳＤ1184は東端部の地山面で発見した南北溝である(第10図)。おおよそ等高線に直交するように延びて

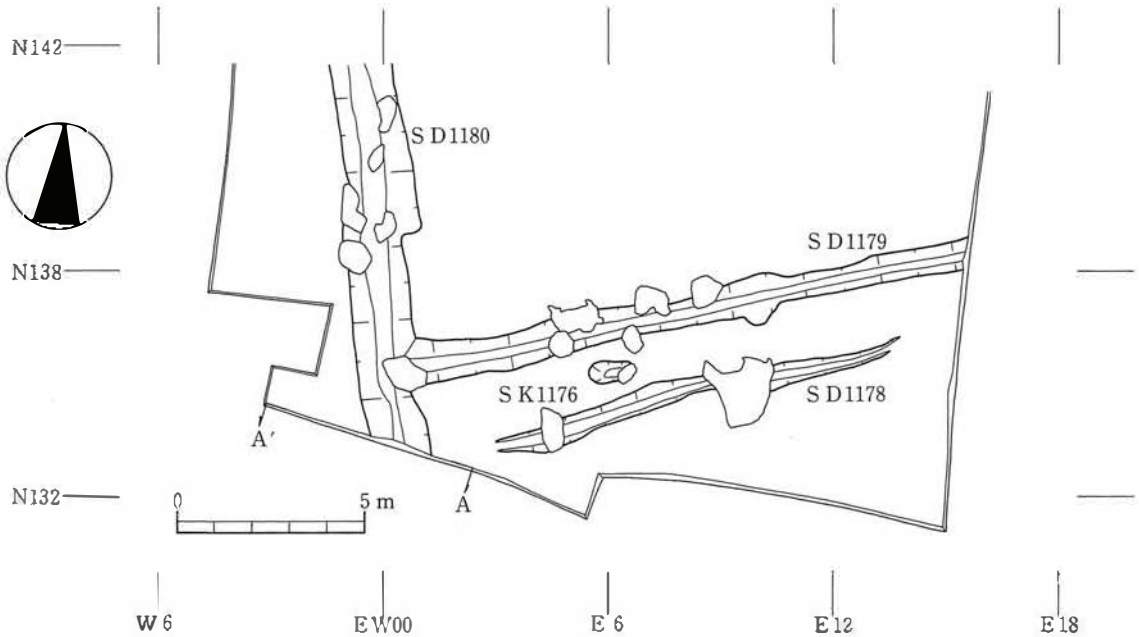


番号	遺物名	遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
1	赤焼き土器・高台杯	ＳＤ1184・１層	【外面】口縁・体部：ロクロナデ、底部：糸切り→ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(19.9)	(9.6)	(6.6)	R－10
2	赤焼き土器・杯	ＳＤ1184・１層	【外面】口縁・体部：ロクロナデ、【内面】ロクロナデ	(14.2)	(4.8)	(2.7)	R－11
3	赤焼き土器・壺	ＳＤ1184・１層	【外面】ロクロナデ、【内面】ロクロナデ				R－51

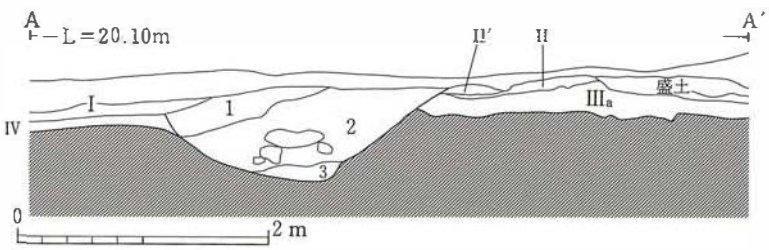
	遺物名	遺構・層位	技法	分類	特徴	登録番号
4	軒丸瓦	ＳＤ1180・１層			蓮弁蓮華文	R－35
5	平瓦	ＳＤ1180・１層	一枚作り	ⅡＢ類	【凹面】布目→軽いナデ、【凸面】縄叩き目（つぶれぎみ）	R－65
6	平瓦	ＳＤ1180・１層	桶巻き作り	ⅠＡ－ｂ類	【凹面】第１次布目→ナデ→凸型台圧痕、【凸面】第２次布目→凸型台圧痕	R－60

第20図　ＳＤ1184・1180出土遺物

いる。平面的な形態は、北半部は直線的であるが南半部は西側に緩やかに湾曲している。壁は緩やかに立ち上がっているが、底面は南側から北側に向かって大きく傾斜しており、北端部と南端部とでは約1.9mの比高差がある。規模は、南北11.7m、幅0.8〜1.3m、深さ0.1〜0.3mである。堆積土はにぶい黄褐色砂質土を主体としている。遺物は、1層から土師器杯、須恵器杯・蓋・甕、赤焼き土器杯・高台杯・甕が出土している(第20図)。土師器杯はいずれも体部の破片である。須恵器杯はロクロからの切り離しがヘラ切りのものが1点出土している。



第21図　B区南東隅の遺構



層位	色調	土質	特徴
I	褐色 (10YR4/4)	砂質土	しまりなし
II	黄褐色 (10YR5/8)	砂質土	
II	褐色 (10YR4/6)	砂質土	
III	暗褐色 (10YR3/4)	砂質土	混入物ほとんどなし。均質
IV	褐色 (10YR4/4)	砂質土	地山ブロックを多く含む
1	褐色 (10YR4/4)	砂質土	混入物ほとんどなし
2	褐色 (10YR4/4)	砂質土	地山ブロック (大小) を多く含む
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質土	地山細粒を含む。堅くしまる

第22図　SD1180断面図

(4)　SD1180溝跡

SD1180は東半部で発見した南北溝である（第10・21・22図)。大部分は地山面において確認しているが、旧表土が残存している調査区南端部においては第II層上面から掘り込んでいることを確認している。南北両端とも調査区外へ延びており、確認できたのは水平距離で約43mである。方向は北で約10度西に偏している。幅は0.4〜0.7mであり、深さは約1.0cmである。底面は南側から北側に向かって大きく傾斜しており、比高差は約8.3mである。遺物は須恵器瓶、転用硯（図版3－6)、軒丸瓦（第20図4)、平瓦などが出土している。転用硯は須恵器甕の体部破片を利用したものである。

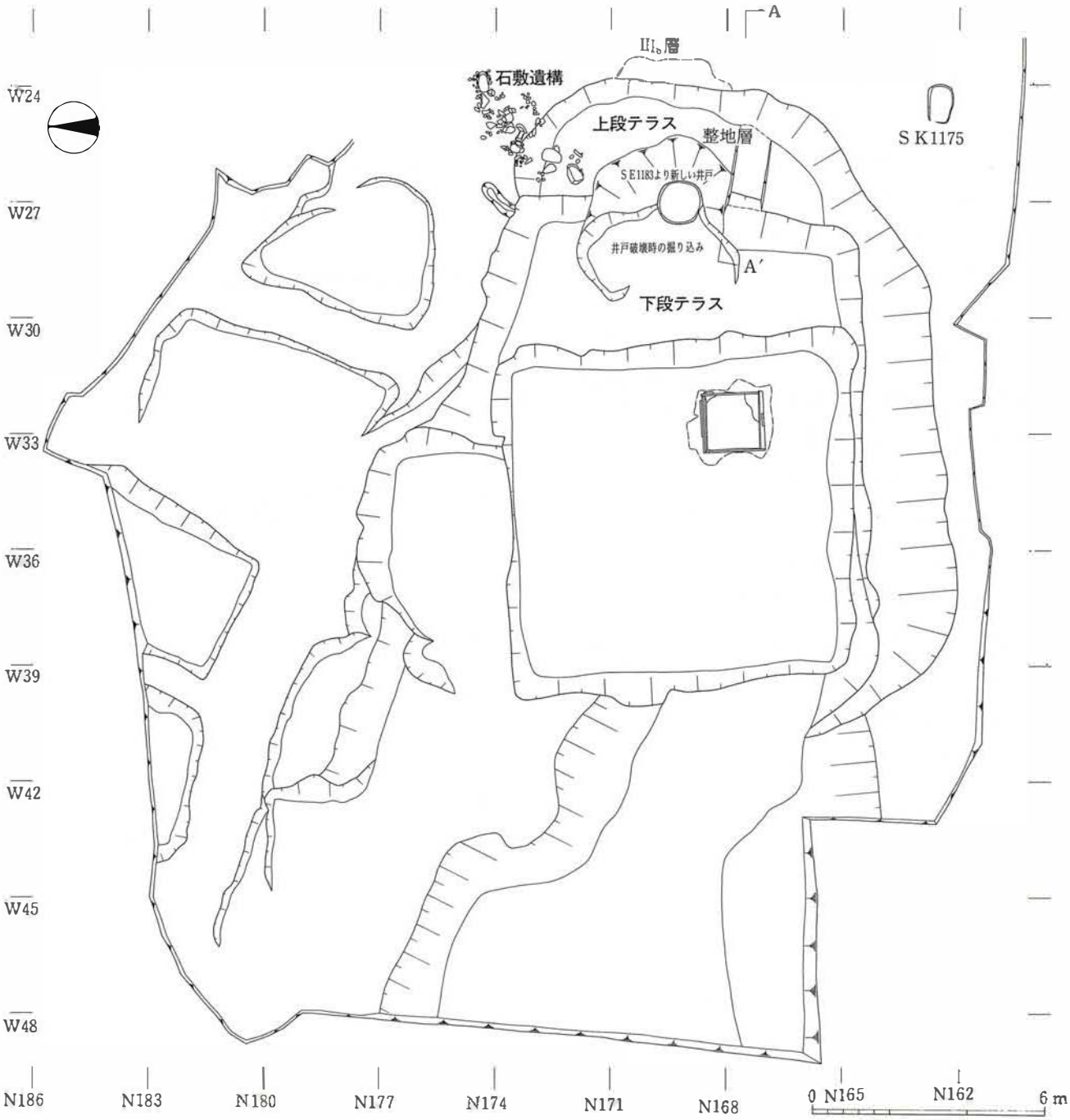
(5)　SD1179溝跡

SD1179は南東部の地山面で発見した東西溝である(第21図)。西側がSD1180の東壁にほぼ直角に連結している。一方、東側は調査区外へ延びており、確認できたのは15mである。方向は東で約11度北に偏し

ている。幅は0.7〜1.2mであり、深さ約25cmである。底面は西側から東側に向かって傾斜しており、比高差は約1.5mである。遺物は土師器甕、須恵器甕、赤焼き土器高台杯が出土している。

(6) ＳＤ1178溝跡

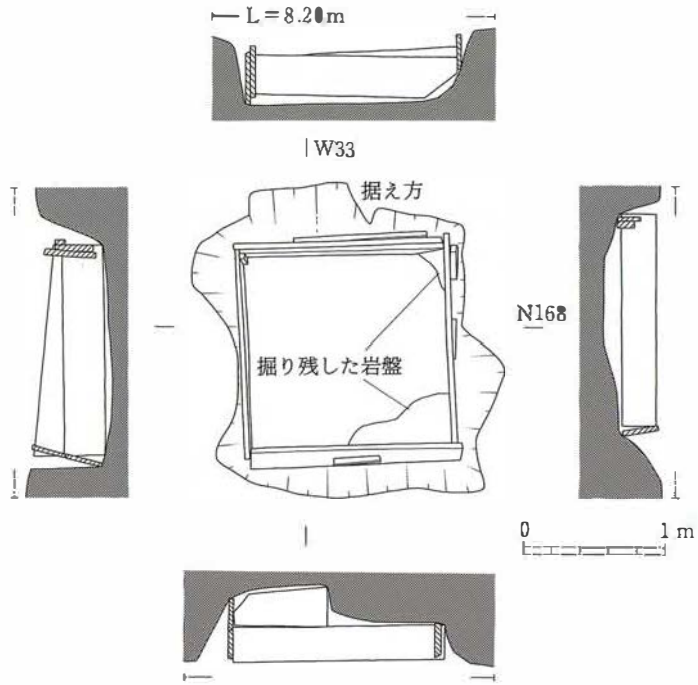
ＳＤ1178は南東部の地山面で発見した東西溝である(第21図)。途中地山の石で分断されている部分もあるが11.2mにわたって検出した。方向は東で約14度北に偏している。幅は0.4〜0.7mであり、深さは最も深いところでも約10cmである。底面は西側から東側に向かって傾斜しており、比高差は約2.5mである。遺物は出土していない。



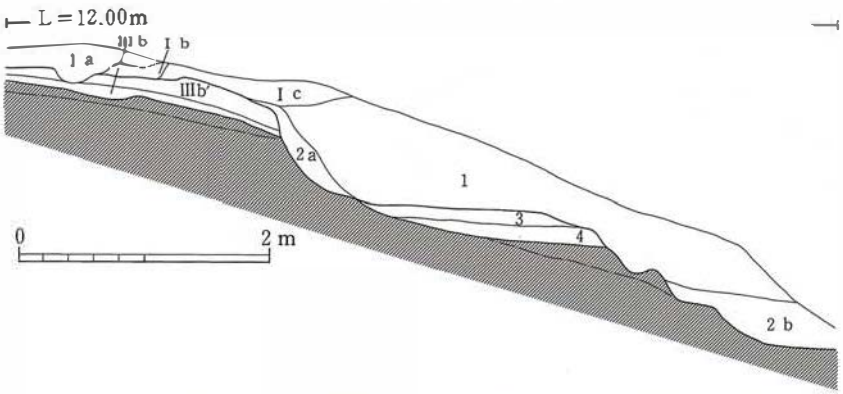
第23図　ＳＥ1183平面図

(7)　ＳＥ1183井戸跡

ＳＥ1183は西半部の平坦面で発見した近代の井戸跡である（第23図）。位置的には南側の谷の最も奥まった地点にあたり、北斜面に接して掘削されている。構造的には地山を掘り凹めただけの素掘りの井戸であり、一段深い桝状の施設を備えている。東側には上下２段のテラスがあり、上段テラスの北辺に通路状の石敷き遺構がある。なお、これら全体を囲むように南側の斜面裾部が東西約14mにわたって大きく抉られている。井戸本体は灰白色火山灰がブロック状に入る南側の谷の堆積土を掘り込んでおり、上段テラスも灰白色火山灰降下後の黒褐色土（Ⅲｂ層）から掘り込んでいる。上段テラスと下段テラスの境は現代の井戸によって破壊されている。



第24図　ＳＥ1183桝平面図・立面図



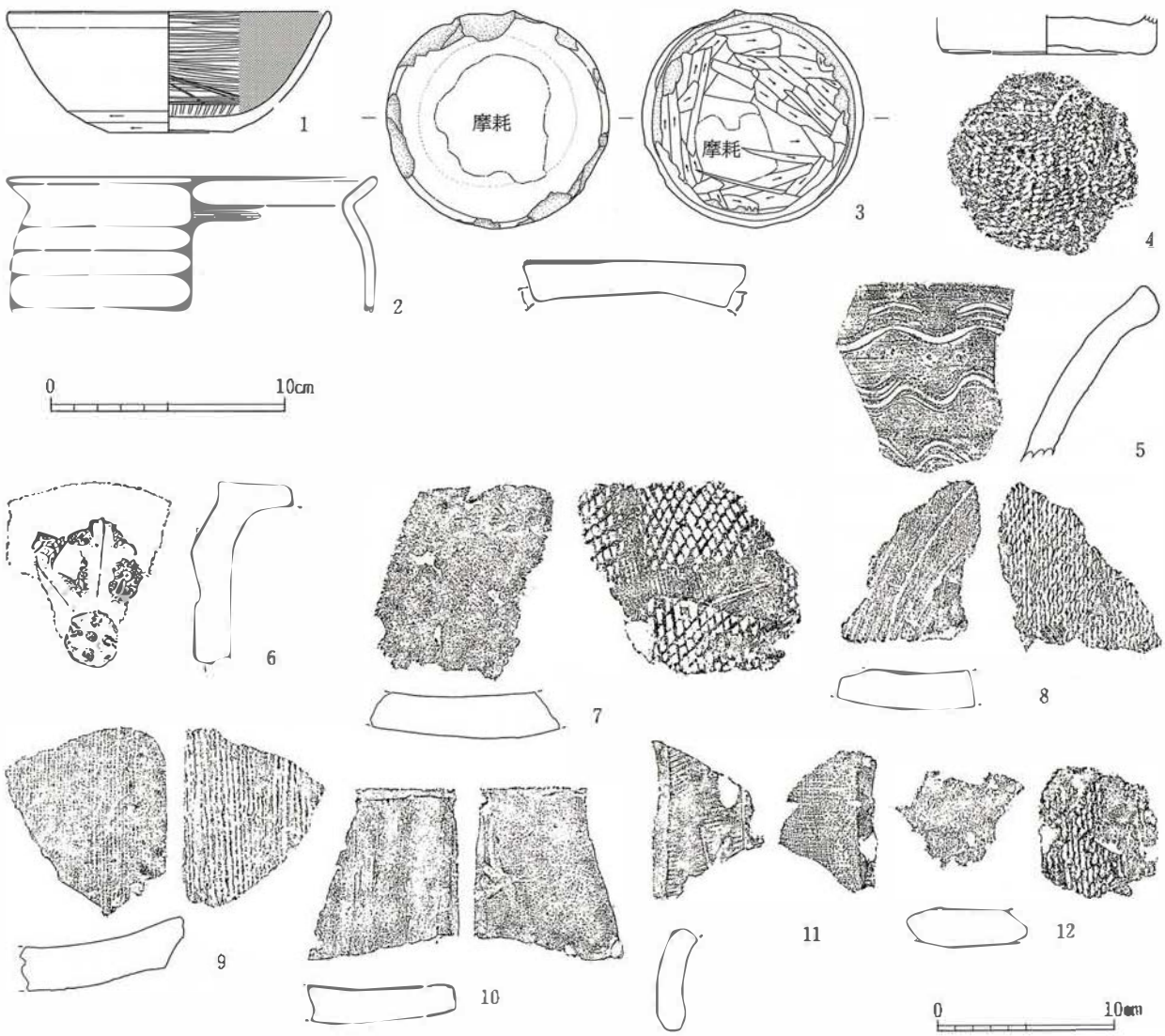
層位	色調	土質	特徴
Ⅰa	にぶい黄褐色（10YR5/4）	砂質土	地山細粒や砂を多く含む
Ⅰb	明黄褐色（10YR6/8）	砂質土	地山粒を含む
Ⅰc	黄褐色（10YR5/6）	砂質土	石を含む
Ⅲ	暗褐色（10YR3/3）	砂質土	褐色（10YR4/4）砂質土を多く混入
Ⅲ	暗褐色（10YR3/3）	砂質土	地山小ブロック・細粒を含む
1	褐色（10YR4/6）	砂質土	人頭大～拳大の石を多量に含む
2a	暗褐色（10YR3/3）	砂質土	地山細粒を多く含む
2b	黒褐色（2.5Y3/1）	粘質土	植物質腐植土が層状に入る。グライ化
3	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質土	地山細粒を多く含む
4	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質土	地山小ブロック・細粒を含む

第25図　ＳＥ1183テラス断面図

井戸本体については平面形が正方形であり、規模は一辺8.8～9.2m、深さ約1.5mである。地山に大きな礫が含まれているため、その掘り残しや抜けた穴によって壁や底面は凹凸が著しいが、基本的に壁は垂直であり、底面は平坦である。桝は横板を組んだ側を持つもので、中央よりやや南東隅寄りに設けられている（第24図）。桝の構築に際しては、側面より一回り大きな据え方を掘り、その上部に横板を組んだもので、掘り方の底面がそのまま桝の底面となっている。側板は、北・西辺と南辺の西半分は横板を２段にしているが、掘り方内に一抱え以上の大きな礫が露出している南辺東半分や東辺は１段となっている。それらの固定方法は、横板の一方の小口面がそれぞれ隣り合う横板の端部に直角にあたるように合わせ、掘り方の裏込めによって固定している。平面形は正方形であり、規模は一辺1.5m、深さ0.4～0.6mである。掘り方は、平面形が不整形であり、壁の立ち上がりも一様ではない。規模は南北1.9～2.2m、東西1.6～1.9mである。堆積土についてみると、桝内部はグライ化した柔弱な暗灰色土であるが、本体には地山ブロック層および黒褐色土の厚い層が粗く交互に推積しており、人為的に埋め戻された可能性がある。遺物は、本体の堆積土から現代の磁

器染付碗、桝の底面付近から揚水ポンプのパッキンが出土している。

テラスについては、上段は地山を削り出した後に灰黄褐色土で整地しているが、下段は地山を削り出しただけである（第25図）。規模は、上段が東西３ｍ、南北９ｍ、深さ約１ｍであり、下段が東西３～４ｍ、南北９～10ｍ、深さ約1.1ｍである。石敷遺構は、上段テラスからその外側にかけて延びているもので長さ約４ｍにわたって検出した。幅約１ｍの範囲におおよそ長さ50cm、幅25～35cmの大きめの石を中央に据え、その周辺に小砂利から拳大の石を詰めて構築している。据え方は検出できず、上段テラスにおいては整地



番号	遺物名	地区／層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号	図版番号
1	土師器・杯	A区／Ⅰ層	【外面】口縁・体部：ロクロナデ、体部下端部～底部：回転ヘラケズリ 【内面】ヘラミガキ・黒色処理	(13.8)	5.2	5.1	R－15	
2	土師器・甕	B区東／Ⅰ層	【外面】ロクロナデ、タール状付着物あり、【内面】ヨコナデ、黒色の厚い付着物あり	(15.7)			R－16	
3	円面硯	No.3／Ⅲ層	【外面】ロクロナデ、中央部に顕著な使用痕あり、【内面】工具によるケズリ、中央部に使用痕				R－14	図版3－5
4	縄文土器・深鉢	No.3／Ⅰ層	外面底部全面に縄文圧痕あり、胎土に石英粒を多く含む				R－53	
5	須恵器・甕	A区／谷埋土	【外面】ロクロナデ→波状沈線【内面】ハケメ				R－24	

	遺物名	地区／層位	技法	分類	特徴	登録番号
6	軒丸瓦	B区東／Ⅰ層		B類 121	8葉の重弁蓮華文、中房が円盤状、蓮子構成は1＋4、周縁蓮子は楕円形で間に区画なし	R－34
7	平瓦	B区東／Ⅰ層	桶巻き作り	ⅠD類	【凹面】ナデ、【凸面】格子叩き目→凹型台圧痕	R－39
8	平瓦	B区東／Ⅰ層	一枚作り	ⅡB類	【凹面】布目→軽いナデ→ヘラ描き、【凸面】縄叩き目（つぶれぎみ）	R－63
9	平瓦	B区東／Ⅰ層	一枚作り	ⅡB類	【凹面】布目→ナデ、【凸面】縄叩き目（つぶれぎみ）	R－67
10	平瓦	A区／Ⅰ層	桶巻き作り	ⅠA類	【凹面】ナデ→凸型台圧痕、【凸面】第２次布目・凹型台圧痕→ナデ	R－40
11	丸瓦	B区東／Ⅰ層	粘土板巻き作り	ⅠA類	【凹面】第１次布目→第２次布目、【凸面】平行叩き目	R－61
12	平瓦	B区東／Ⅰ層	一枚作り	ⅡC類	【凹面】布目、【凸面】縄叩き目	R－64

第26図　遺構外出土の遺物

の際に一緒に埋め込んでいる。

6. 遺構外出土の遺物

(1) 谷の堆積土出土の遺物

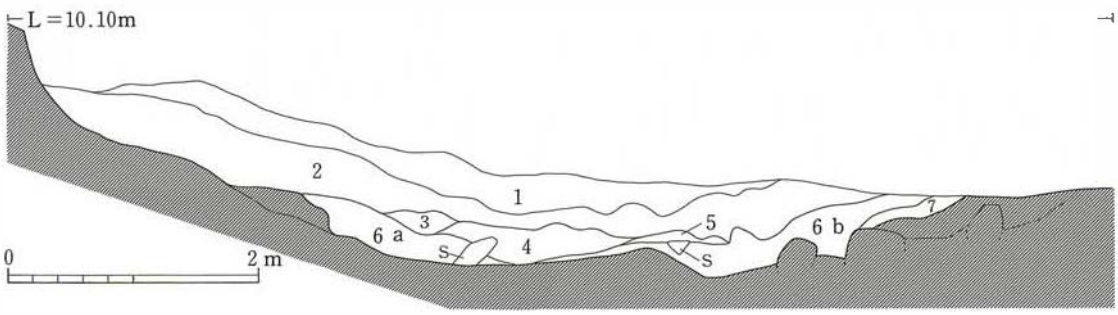
谷は調査した範囲も狭く、遺物も数点出土したのみである。北の谷においては灰白色火山灰がブロック状に入る亜泥炭層から灰釉陶器瓶の体部破片が1点出土している。外面に黄緑色の灰釉がかかっている。また、A区南端部の黄褐色土層から土師器杯・甕・須恵器甕、灰釉陶器小瓶などが数点出土している。灰釉陶器小瓶は体部の小破片である。割れ口は滑らかであり、外面上部にはオリーブ色の灰釉が点々と付着している。特徴的な部分が出土していないため年代等は不明である。南の谷においては灰白色火山灰降下後の黒褐色土層から瓦質土器火鉢の口縁部破片が1点出土している。口縁部の形態から近世以降の製品と考えられる。

(2) 第III層出土の遺物

土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、赤焼き土器杯・高台杯、円面硯、平瓦などが少量出土している。円面硯は硯部のみの破片資料である(第26図3)。硯面は、中央部が若干盛り上がっており、その部分を中心に顕著な使用痕が観察できる。一方、その裏面は逆に凹んでおり、幅0.5cm前後の工具によって不定方向に強く削り取った痕跡が認められる。この面においても中央部よりやや外側に寄った位置に摩耗部分がある。また、側面については、硯面の下全体に敲打による加工痕および一部に研磨痕がある。本資料が円面硯であることは硯面の形態から疑いないところであるが、全体がどのような形態になるものか判断する材料がなく不明である。また、裏面に認められた摩耗部分から、二次的にその面も硯として使用した可能性がある。その際、側面に認められた加工痕との関わりが問題になろうが、それについては明らかでない。平瓦は多賀城政庁創建期のものである。

(3) 第I層出土の遺物

土師器杯・甕・甑、須恵器杯・高台杯・甕・瓶、赤焼き土器杯・高台杯、緑釉陶器、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、縄文土器深鉢、石鏃、砥石が出土している。土師器杯はロクロ調整を行なわないものもわずかにみら



層位	色調	土質	特徴
1	黒褐色 (10YR3/1)	砂質土	しまりなし
2	黒褐色 (10YR3/1)	砂質土	地山細粒を多量に含む。しまりなし。グライ化
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘質土	しまりなく柔らない
4	黒褐色 (10YR2/3)	亜泥炭層	灰白色火山灰ブロックを含む
5	灰白色		灰白色火山灰の2次堆積層
6a	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質土	地山細粒を多量に含む。ややしまりなし
6b	黒褐色 (10YR3/2)	砂質土	地山細粒を多量に含む。しまりなくやや粘性あり
7	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質土	地山細粒を多量に含む

第27図 南の谷断面図

れるが、大部分はロクロ調整を施したものであり、底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリしたものが見られる。須恵器杯は底部がヘラ切りのものや、全面を回転ヘラケズリしたものなどが出土している。緑釉陶器は碗あるいは皿の口縁部破片資料である。濃緑色の釉が施されており、内外両面ともヘラミガキは観察できない。平瓦は大部分が多賀城政庁創建期のものであり、わずかに第Ⅳ期のものも出土している。

7. 考察

(1) 古代の遺構の年代と変遷

今回発見した遺構は、第Ⅱ層との関係が確認できたＳＤ1180・1179をのぞくといずれも地山面で発見したものであり、相互の層位的関係および新旧関係を把握できなかったものである。従って、それらの年代については出土遺物の年代が唯一の手掛かりとなる。多賀城跡出土土器については白鳥良一氏の研究によってＡ～Ｆ群に分類されており（註２）、その後、年代観については一部修正が加えられている（註３）。以下、それらの成果に基づき発見遺構の年代について考察する。なお、本書中で「赤焼き土器」と呼んでいる土器は、多賀城跡出土土器の「須恵系土器」と同一の土器である。年代観についても同様である。

ＳＩ1173は今回の調査で発見した遺構の中では最も多くの遺物が出土した遺構である。カマドとその周辺から完形品およびそれに近い状態の土師器杯９点をはじめ土師器甕体部破片などが出土しており、それらを一括資料として扱うことが可能であることは既に見たところである。それらの土器の特徴として次の点があげられる。

① 土師器杯・甕は、いずれもロクロ調整を行ったものである

② 須恵器は２層から底部ヘラ切りの杯や蓋・甕・瓶などの破片資料が数点出土しているのみであり、赤焼き土器は全く出土していない

③ 土師器杯の底部は回転糸切り無調整である

④ 土師器杯の器高/口径比は0.31～0.35であり、底径/口径比は0.36～0.44である。

①③の特徴はＢ群からＦ群にかけて見られるものであるが、②の赤焼き土器が全く出土していない点を重視すればＥ・Ｆ群に属する可能性は消えるであろう。底部の再調整については、Ｃ群段階では回転ヘラケズリを行なうものが比較的多く、Ｄ群段階でも再調整されるものが約1/2であったのが、Ｆ群段階になると無調整のものが主体を占めるという傾向が指摘されている。同様に、口径に対する底径の比率についても、大きなものから小さなものへと変化していることが明らかにされている。Ｄ群土器に位置付けられている多賀城跡第61次調査（鴻の池地区）第10層出土土器は土師器が主体を占め、初源的な須恵系土器とわずかの須恵器、灰釉陶器で構成されるものである（註４）。この土師器杯は器高/口径比が0.27～0.38、底径/口径比が0.36～0.46であり、本土器群と極めて近似している。多賀城跡第61次調査第10層出土土器は底部に再調整を行なうものが1/2存在することから、本土器群はそれより新しい要素を持つとみることができよう。以上の点から本土器群はＤ群土器の中でも新しい段階、Ｅ・Ｆ群土器に伴う一般的な須恵系土器出現直前頃に位置付けることが妥当である。Ｄ群土器は９世紀後半頃、Ｅ群土器は10世紀前半から後半にかけての頃のものとされていることから、ＳＩ1173出土土器は９世紀末頃の年代と考えられる。これらの土器は住居廃絶時に最も近い遺物であることから、ＳＩ1173の年代についても同様の年代が与えられよう。

ＳＢ1172、ＳＫ1174・1176・1185、ＳＤ1184については遺物の出土量が少なく、しかも破片資料しか出土していないものもあるためＡ～Ｆ群土器のいずれに相当するものかは明確にできない。ＳＢ1172とＳＫ

1174からはロクロ調整を施した土師器甕が出土していることからC群以降であり、9世紀前半以降とすることができる。赤焼き土器を含まずロクロ調整を施した土師器杯・甕が出土しているSK1185はC・D群に相当するであろうから9世紀頃、赤焼き土器が出土しているSD1176・1184はE・F群のいずれかに相当することからおおよそ10世紀前半頃と考えておきたい。

SD1178〜1182は黒褐色土を堆積土とすることで共通する溝である。出土遺物もすべて古代の土器と瓦であり、中世以降の遺物は含んでいない。このうちSD1180は第II層上面から掘り込んでいることを確認しており、それと連結するSD1179も層位的には同様であったことが知られる。第II層は赤焼き土器を含む第III層を覆うことからE群以降の堆積層であることは明らかであるが具体的な年代は不明である。赤焼き土器が出土しているSK1176、SD1184の堆積土はいずれも黒褐色土を全く含んでいないことから、E・F群の段階としたSK1176、SD1184より新しい時代の遺構である可能性が高い。両者の間に大きな時間差を想定すべきかもしれないが、おおよそ10世紀前半以降のものと見ておきたい。

SB1171については特徴的な遺物が出土していないため年代は不明である。しかし、SB1172やSI1173とは方向がほぼ同じであり、SB1172とは柱穴埋土が類似していることからおおよそそれらと同じ頃の年代と推定され、9世紀頃と見ておきたい。SK1177・1175については遺物が出土していないことから年代は不明である。

各遺構の年代を整理すると次のとおりである。

SB1171	9世紀頃
SB1172	9世紀前半以降
SI1173	9世紀末
SK1174	9世紀前半以降
SK1185	9世紀以降
SK1176・SD1184	10世紀前半頃
SD1178〜1182	10世紀前半以降

これらはおおよそ次の三つの段階にまとめることができる。

I期：9世紀頃の遺構（SB1171・1172、SI1173、SK1174・1185）

II期：10世紀前半頃の遺構（SK1176、SD1184）

III期：10世紀前半以降の遺構（SD1178〜1182）

各地区ごとの遺構の分布をみると、I期の遺構はA区、II期の遺構はB区と時期的に偏って存在している。発見した遺構の数が少ないため明らかではないが、I・II期については時期ごとに場の使われ方が変化した可能性がある。

遺構の性格については不明であるが、調査区全体を通じて掘立柱建物が竪穴住居が存在したのはI期のみであり、地形的にも居住空間として適した場ではなかったことが推定される。むしろ掘立柱建物跡と竪穴住居跡がA区南東部に片寄って発見されていることから、既に宅地化された調査区外東側に遺構が広がっている可能性が考えられる。また、B区からも土器、陶器、硯、瓦などが出土していることから、調査区外南側にも遺構の存在を想定できよう。

(2) 近代の遺構について

SE1183は一辺約9m、深さ約1.5mの大井戸であり、貯水量も膨大であったと推定される。かかる井戸

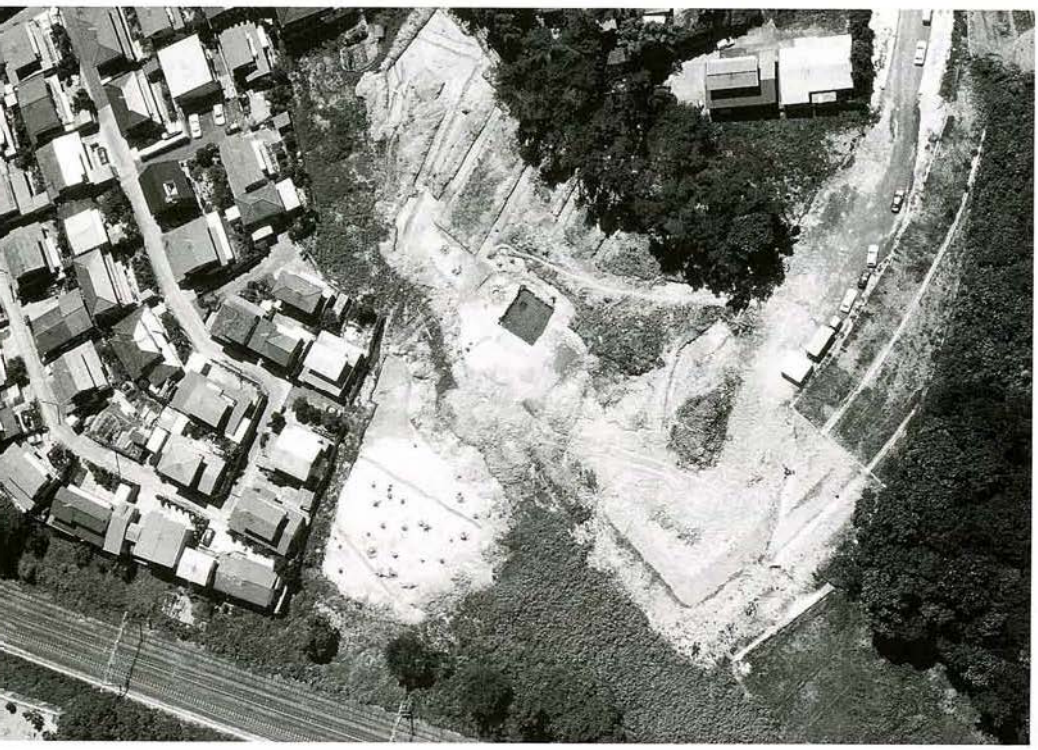
は１軒の家はおろか一般的な集落の井戸としても必要以上の規模であるといえる。太平洋戦争の頃、本市（当時　多賀城村）東部から七ケ浜町にかけて海軍工廠が建設され、本調査区の南約200mの留ケ谷字影屋敷一帯に工員養成所および男子学徒寮が配置されている。これらの施設建設に必要な水は付近の井戸や湧水を利用することにしたとされている（註５）。位置、規模、年代などの点からＳＥ1183は海軍工廠建設時に使用された可能性がある。

8.　まとめ

1.　平安時代の掘立柱建物２棟、竪穴住居１棟、溝１条、土壙３基、平安時代中頃以降の溝５条、近代の井戸１基、年代不明の土壙２基を発見した。
2.　古代の遺構の性格は不明である。

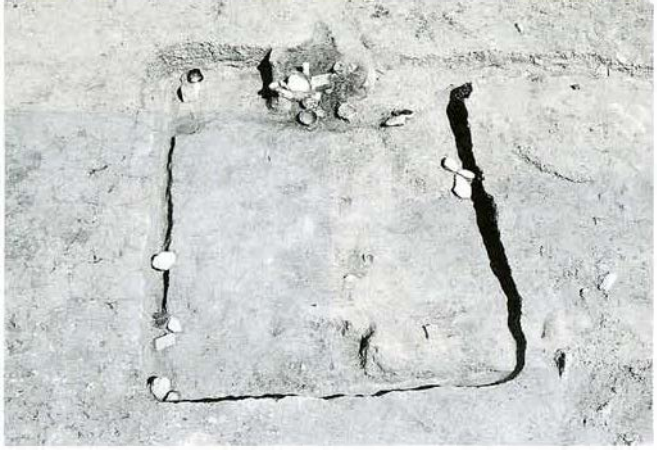
註１　№４・10・11・12・15については図示していない。№15は土師器甕の体部破片資料である。頸部はヨコナデあるいはロクロナデ、体部は縦方向にヘラケズリしている。№10は土師器杯の口縁部破片資料であり、11・12は底部破片資料である。３点とも表面が磨滅しているため土師器か赤焼き土器かの判断が難しいが、いずれも外面と比較して内面の色調が黒いことから黒色処理を想定し、土師器であると判断した。№12は底部が回転糸切り後無調整である。№４は砥石である。
註２　白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要Ⅶ』1980
註３　白鳥良一「第Ⅶ章　考察(2)土器」宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡　政庁跡本文編』1982
註４　柳沢和明「Ⅲ　第61次調査」宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992
註５　難波信雄「第三章　戦争と多賀城　　第二節　多賀城海軍工廠について」多賀城市『多賀城市２　近世・近現代』1993

調査区空中写真（北東より）
中央よりやや下、線路の左手が調査区



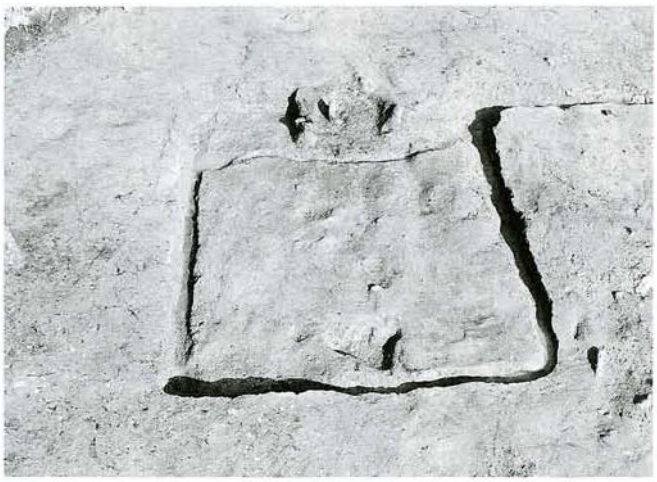
調査区空中写真（真上より）

B区全景写真（北より）

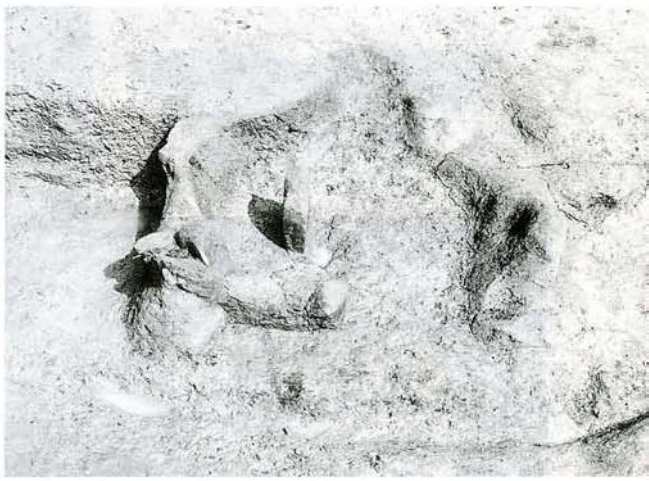


S I 1173　遺物出土状況（西より）

S I 1173　カマド周辺遺物出土状況（南より）

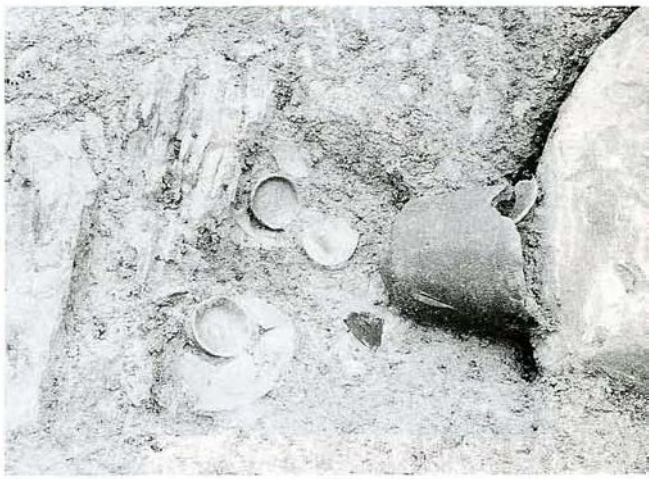


S I 1173



S I 1173　カマド

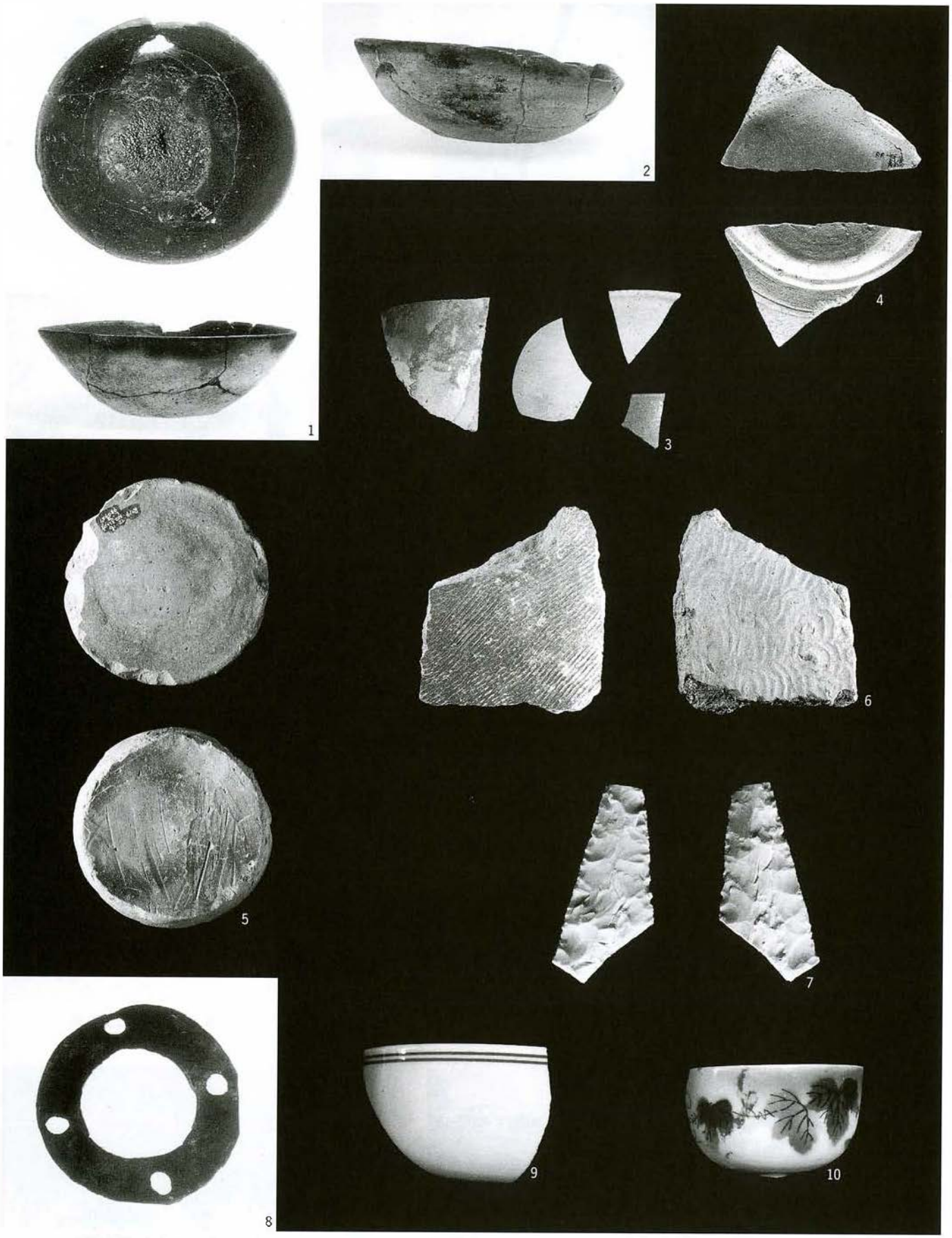
S K 1175



S K 1176　遺物出土状況

S E 1183

第Ⅲb層とそれに覆われる灰白色火山灰
（B区S E 1183上段テラス東壁）



1　土師器杯　S I 1173（R－1）
2　土師器杯　S I 1173（R－3）
3　（左）灰釉陶器瓶　北の谷（R－21）
　（中）灰釉陶器小瓶　北の沢（R－20）
　（右上）灰釉陶器碗　S I 1173（R－18）
　（右下）緑釉陶器碗　№2トレンチ（R－17）
4　灰釉陶器碗　S I 1173（R－19）
5　円面硯　№3トレンチ（R－14）
6　転用硯　S D1180（R－28）
7　石鏃　B区L－1（R－33）
8　パッキン　S E1183（R－43）
9　磁器茶碗　S E1183（R－29）
10　磁器茶碗　S E1183（R－30）

図版3　出土遺物

高崎遺跡出土燈明皿内の残存物について

国立歴史民俗博物館　永　嶋　正　春

はじめに

標記の遺跡から出土した燈明皿様土器１点について、その付着残存物を調査した。従前の調査を踏まえれば、本土器も燈明皿として使用されたものに間違いはないと思われるが、念のため確認したものである。ただしこの付着物の中にも、燈心に使用したと思われる植物質素材が存在するかどうかは、きちんと確認をする必要があり、その意味では本調査もまた重要である。

調査結果

付着物は、主に内底面部に残存しており、かなり艶のある黒色膜状を呈しているが、その表面は全体としては月の表面を見るがごときアバタ状を示しており、網状のクラックも観察された(図１)。また口縁部の内面にも、ごく一部にではあるが、同様の付着物が認められた(図２)。両個所より微少な試料を採取し、ポリエステル樹脂に埋包固定後切断し、最終的には薄片状態にして光学顕微鏡による観察を行ったところ、両者の試料について、油状の層とともに植物質の素材が確認できた(図３、４)。この植物質素材の顕微鏡的な性状は、従前の調査で検出されたものに全く一致しており、草本性の燈心材とみて間違いはなかろう。

（参考）永嶋正春「高崎遺跡出土燈明皿内の残存物について」『高崎遺跡―第11次調査報告書―』多賀城市教育委員会　1995

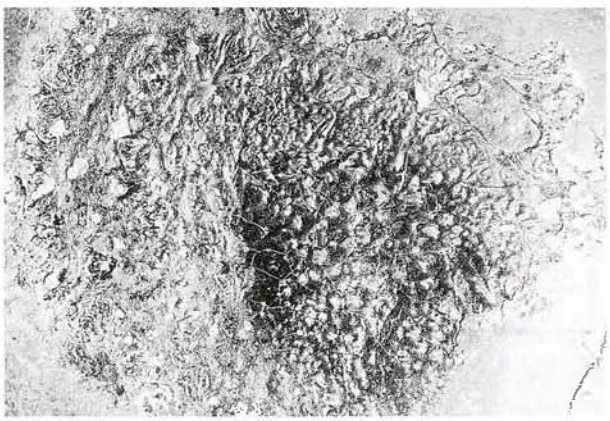


図１　内底面付着物　1.2×

図２　口縁部内面付着物　1.2×

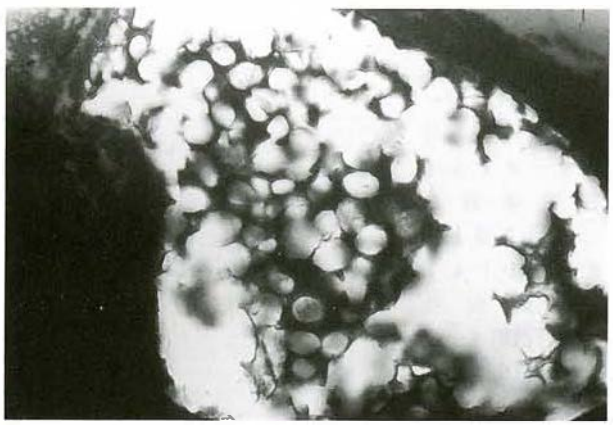


図３　付着物層断面（内底面）　600×

図４　付着物層断面（口縁部）　600×

報告書抄録

ふりがな	たかさきいせき
書名	高崎遺跡
副書名	第13～16次調査
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第42集
編著者名	千葉孝弥・石川俊英・武田健市
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985　宮城県多賀城市中央二丁目27－1
発行年月日	西暦1996年3月31日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
高崎（第13次）	多賀城市高崎一丁目117－6	18	018	38度17分25秒	141度00分17秒	19940704～19940729	185	住宅建築
高崎（第14次）	多賀城市高崎一丁目14－1	18	018	38度17分06秒	141度00分13秒	19940824～19940831	257	倉庫建築
高崎（第15次）	多賀城市高崎二丁目246－14，246－19	18	018	38度17分34秒	140度59分51秒	19940907～19940928	200	住宅建築
高崎（第16次）	多賀城市高崎一丁目16－1外6筆	18	018	38度17分23秒	141度00分11秒	19950619～19950828	2,137	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高崎（第13次）	集落		土壙	須恵器，瓦	
高崎（第14次）	集落	平安	溝	須恵器 土師器 瓦	
高崎（第15次）	集落	平安	竪穴住居 土壙	須恵器，土師器	
高崎（第16次）	集落	平安 近代	掘立柱建物 竪穴住居，土壙，溝 井戸	土師器 磁器茶碗	竪穴住居から灯明皿出土

多賀城市文化財調査報告書第42集

高崎遺跡

－第13～16次調査報告書－

平成8年3月31日　発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）368－0134

発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368－1141

印刷　今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町4－5
電話　（022）288－6123